
光剣を持つ者

だちけん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

光剣を持つ者

【Nコード】

N0813P

【作者名】

だちけん

【あらすじ】

この話はMMOのアラド戦記の鬼剣士とゼロの使い魔のクロスオーバーです。

といっても都合のいい解釈しかない為、その点はご了承下さい。

初見の人でもわかるように書いていくようにがんばります。

この作品はArcadia様にも投稿しています。盗作ではありません。

せんのでよろしくお願いいたします。

プロローグ

…とある剣士がいた。

彼は皆に避けられていた。

片腕が鬼神に呪われ、変色したその腕は鎖に縛られていた。

彼は老人と出会った。

その老人は自分の呪いを抑える方法を知っているという。

剣士は喜びその方法を試した所、完全に呪いを抑えると同時に老人に繊細な武器の取り扱いを教わった。

その後、彼は光輝く剣を操り亜人・怪物を倒す事を生業としていた。

時には身の丈程の長く頑丈な大剣を片手で使い、戦場を駆け抜けた。

彼は未だに呪われた腕の為に人から避けられていた。

そんな時、目の前に鏡が現れた。

彼が興味本意で触れた時には、彼の姿はこの世界には存在しなかった。

プロローグ（後書き）

初めての投稿で下手ですが、少しずつ書いて行きたいと思います。

少女の出会い

…少女は苦痛を強いられていた。

他の者が出来る事が己に出来ない、しかし諦める訳にもいかず杖を振るっていた。

周りは

退屈にしている者

野次を飛ばしている者

成功して欲しいと思う者

それらの視線を一身に受けながらも、起きるのは爆発だけであった。

6

流石に時間なのだろう、指導者が後一度で出来なければ打ち切ると伝えた。

少女は追い詰められ、このように意識をしながら杖を振るった。それは彼女らしくない弱気な思考であった。

誰でも…私のこの気持ちを解ってくれる者なら誰でも良い。誰かつ！

爆発が晴れたその先には

白髪で

輝いている剣を持ち

腕が左右違う色で

鎖を付けている

風変わりな男がそこに佇んでいた。

少女の出会い（後書き）

いきなり連続投稿…

ペース持つかな…

1
1 / 2 3 一部修正

召喚の詠い

「あなた、誰？」

目の前の、表情に驚きの色が見える少女に対し鬼剣士は少々戸惑いを覚えた。

今さっき自分がいた場所とは全く違う場所にいた。

自分以外に人気が無い場所にいたはず…しかしここは草原。

大勢の、それも子供達がいるのだ。

「私は逆月さかつぎと言うものだが、君は？そしてここは一体何処だ？」

「サカヅキ？器みたいな名前ね…平民なのに貴族に対して失礼じゃないかしら！」

私はルイズ・フランソワーズ・ル・ブラン・ド・ラ・ヴァリエール。まあいいわ、そしてここはトリステイン魔法学院よ。何処の傭兵なのかしら？あと、その光り輝く剣は何！？」

ルイズと名乗る少女は桃色がかったブロンドの長い髪に、透き通るような白い肌。

首から下を覆うような黒いマントに、ブラウスにブリーツスカート。

そして手には木製の杖らしきものを。

対する逆月は白髪で逆毛だっている髪、普通の黄色人種の肌にそれとは違う白い左腕の肌と鎖と腕輪。

上半身は裸に青い袖なしジャケットを羽織り、下半身はこれまた青いズボンに白色の長い革ベルトを。

右手には太陽の光のような光り輝く剣を握っている。

「なんだあの剣は!？」

「まさかあの男はメイジくずれなのか？」

（魔法学院？貴族？ギルドではない…となると全く違う地域に来てしまったのか？）

周りの少年少女達がざわめいているが、このまま考えていても埒が明かないので目の前の少女に答える。

「ルイズ…っと思いが覚えきれないのでルイズと呼ばせてもらう。まず一つずつ答えるが、俺はアラド大陸・ヘンドンマイアの傭兵だ。あとこの剣は光剣こうけんと呼ばれる特殊な剣。古代の遺跡からの発掘やモンスターが隠し持っているものを使っている。」

とりあえず質問には簡潔に。

少女が偉そうにしているが子供の戯言として聞き流し、光剣は誰でも知っている知識の部分だけを伝え、出力を切る。

柄だけの剣、というのも少々違和感があるが。

ルイズが何か言おうとしたそこに一人だけ居た中年の男性が逆月に注意を払い近づいてくる。

「失礼。私、トリステイン魔法学院にて教鞭を取らせていただいております、ジャン・コルベールと申します。」

「これは一体どういうことですか？私は別な場所に居たはずだが。」

「貴方は彼女の唱えた『サモン・サーヴァント』によって、ここに召喚されてきたのだと思われます。」

「『サモン・サーヴァント』…使い魔の召喚？俺は人間だが、このメイジは人まで召喚するものなのか？」

自分がいたところでも精霊を召喚して戦う少女達がいたが、人間は見たことが無い。

「人が呼び出されるといいうのは前代未聞です。本来ならば貴方の後

ろにいる使い魔などが来るのですが…」

確かに後ろを見れば大小さまざまな種類の使い魔がいる。

ドラゴンからカエルまで、と言うかドラゴンまで使役しているのは驚いた。

小型の竜は倒したことがあるものの、あれは逃げる事を考えてもいいレベルの強さだろう。

「それはさておき、ここトリステイン魔法学院では2年生として次の進級に際して使い魔の召喚が許され、呼び出された者を生涯のパートナーとするのです。」

「いきなり呼び出されその少女に一生従えと言う事か？使い魔とは名ばかりで、これじゃ奴隷みたいなものだろう。」

「耳の痛い話ですが……先程も言った通り、人間や亜人のような理性ある者が召喚される、などという事は、今までにない前代未聞な事なのですよ。」

「前例が無いと言ってそのまま従うのはお断りさせてもらう。

貴方は最高責任者では無いようだし、せめてここの学院の最高責任者に話をさせていだきたいのだが。

互いに何も知らない、そのままそれぞれの言い分ばかり言っても話が進まないだろう。」

「ミスタ・コルベール、召喚をやり直させてください」

コルベールが少々考えるとルイズがコルベールという教師に抗議してきた。

「平民に説明するなんて時間の無駄です。次はちゃんとした使い魔を呼び出します。お願いです！」

「ミス・ヴァリエール、それは認められない。」

「どうしてですか!？」

「決まりだから、だよ。初めての召喚により現れた使い魔を見て行使者の属性を判断し、それぞれの専門課程へと進むんだ。

その使い魔を気に入らないから、という理由でいくらでもやり直しをしてしまえば、メイジとしての資質を見るという目的が台無しになってしまう。これは神聖な儀式なんだ。」

「でも、でも……っ、人間の、それも平民を使い魔にするなんて、聞いたことはありません……っ！」

召喚するときに、誰でも良いと考えたことを完全に棚に上げてしまっている。目尻に涙が浮かび、諦めきれずに抗議をする。

「わはは。それって平民風情の資質しか無いってことかー？」

「さすが『ゼロ』のルイズだな！」

周りの生徒は先ほどの疑問もどこかに消え、少女に罵声を浴びせる。少々心が痛む光景である。

「しかし今回は例外な事が起こり、とりあえずこの件は学院長に伺いを立ててからにします。さあ皆さん授業もありますので教室に戻りますよ！」

コルベールは一旦ここで区切りをつけ、他の生徒に戻るように促す。周囲の少年少女たちが次々と杖を振り離陸していく。一人だけ竜の使い魔を召喚した女生徒だけは、その背に乗って飛びあがった。

「すごいな……。」

こっちのメイジは空を自由に飛べるのか。これはますます話を聞かないとまずいことになりそうだ。

「さて、確か逆月さんと言いましたか？貴方には申し訳ないのでが学院長の所へ来てもらえないでしょうか？色々積もる話もあるでしょう。」

「了解。とりあえず話を聞いてからこれからの事を考えたいものですね。」

鬼剣士は既に出力を切っている光剣をしまい、教師と生徒と鬼剣士は情報交換をしながら学園に向かう事になった。…ルイズはしばらくの間ゴネていたが。

召喚の詠い（後書き）

一日で、700PVも頂きありがとうございます（TOT）

気力と時間が有る限り頑張ります！

誤字・脱字修正、感想があればお待ちしております。

作者が悶絶して喜びます（え

11/23 一部修正…ご迷惑をお掛けしましたorz

相互理解（前書き）

亀のようなスピードですが、それでも良ければどうぞ！

相互理解

「…それでは貴方はモンスター…ゴブリンやアンデット、動く石像に鎧を操る人形師。タコのような化け物に精霊の一種と色々なものを相手に傭兵として戦い続けていたんですね。」

「ああ。そしてここの魔法学院は貴族が魔法の上達・習得などを目的として15あたりの子供が学ぶ所。そしてこの大陸は平民と貴族の階級制度があり、ここは王が政治を仕切っている…ということか？」

平原から戻る途中、コルベールが事情を確認しながら逆月に問いかける。

逆月は国の在り様・階級制度は今一つ実感がなかった。

彼は町ですら人から避けられてたのである。

町はおろか国のあり方など知る機会も無く、自分に生きるすべを教えてくれた老人と仕事の依頼者程度の付き合いしかなかったので仕方が無いといえた。

「ええ、その通りです。あと申し訳が無いのですが『サモン・サーヴァント』で使い魔を送り出す魔法は…恐らくございません。」

これには困ったものである。

今まで人の関わりが少ないため戻れなくなる…のはまださほど問題ないが、あの老人にまだ恩を返せていない。

衣食住や風習・宗教、何より今の自分の荷物が少ないことである。

今の所持品は光剣・大剣それぞれ数本、ポーションなどの回復薬・モンスターなどから剥ぎ取ったアイテム・幾ばくかのお金。

残りは倉庫に預けてあつたため満足な状態ではなかった。

「いい加減あきらめて私の使い魔になりなさいよ。

『サモン・サーヴァント』で呼び出されたら全て使い魔にならないといけないのは説明したでしょ!？」

「だからその前提がおかしいんだよ、契約は相互の利益や理解、代償などもあるが絡んで成立する。

そもそもあんな大きなドラゴンを使役する割りにその実力が当人に足りないように見える。

それなのに全く問題なかった…と言う事は、その契約とやらの洗脳に近い強制的な命令が含んであるんだろうよ。

だから俺は拒んだ。まあ、これは後で情報を得てからはつきりと思えたんだけどな。」

逆月はさらに言う。

「そんな訳で俺はこの契約には反対だという訳さ。
まあ、『使い魔になれ』ではなく魔物や亜人を倒せってなら考える
がな。」

コルベールはこの男に対して少々危機感を覚えた。

見た目に反して腕が立つだけでなく頭も切れるようだ。

しかもここの常識が通用しない地域から来たようで、様々な考え方の違いが出ている。

この男は魔法を使えないとは本人の話だがどうもそれ以外の力を隠しているようだ。

「逆月さん、もし可能であれば先ほどの光り輝く剣を見せてはもらえないでしょうか？」

私は今まで生きてきましたが、あのようなきれいな剣を今まで見たことが無いのです。」

ルイズが顔を真っ赤にして詰め寄ってるところにコルベールが口を出す。

探りを入れるようで悪いが、知らない人間に対しては誰でも警戒を持つのは当たり前である。

「すまないがあの剣は私のようなものにしか扱えないと思うぞ。」

「どういことですか？」

「その前に『鬼剣士』と言う人を聞いたことがあるか？」

コルベールとルイズは顔を見合わせてともに首を振った。

「やっぱり知らないか…少し話が長くなるがそれでもいいか？そこから説明しないと悪いんでな。」

「わかりました（わかったわよ）。」

それでは、とゆっくり歩きながら話す。

正直話さないほうがいいのかもしれないが今は相手の信用を得て、その都度立ち回ればいいと思っている。

何より今は先が見えないこの状態で頼れるのはこのコルベールという男と学院長。

学院長が良識ある大人とは限らないため、コルベールに頼り手持ちのカードを切るしかなかった。

相互理解（後書き）

執筆途中のデータが半分飛んでしまい、テンションが下がったただち
けんです。

はい。中々進みません。ゴメンナサイorz

とりあえずコルベールの扱いが少々難しいですね。やはり、原作を
読まないといろいろ厳しいのかな？

感想、誤字脱字報告、いろいろお待ちしています！

力の説明、そして学院へ

「簡単に言えば鬼剣士は『鬼神』と言う存在に呪われ、腕などが変色してしまった人と言う。

その呪いを受けた人は理性を失ってしまうときがあり、それをこの鎖で押さえ込んでいる。

そこまではいいか？」

学園が遠くに見える草原で、歩きながら解説を行う逆月とそれを聞いているルイズとコルベール。

「わかったわ。それであなたの腕の色が左右違うのね？」

「ああ。そしてその理性を失う衝動を鎖で抑え、逆にその力を利用して戦う剣士を鬼剣士と言う。

もしかしたら剣士以外の職業の人もあるかもしれないが、俺は知らないし割愛する。」

「ほう、自分にかかる呪いを逆に利用して生きるとは…なかなか逞しいものがありますね。」

「そしてその中でもこの腕輪・レギュレーターを付けて鬼神の衝動を抑えきり、

繊細な武器の扱いと己の力で生きる剣士を『ウェポンマスター』という。

まあこれは通称であってそういう人種なんだと思ってくれればいい

が。」

俺もあくまで聞いた内容なのでこれで合ってるか自信はないが、間違っではないだろう。

「そしてさっきの続きだけど、その鬼神の力を押さえ込み繊細な武器：この場合は光剣かな、それがようやく使いこなせるのさ。

因みにこの剣は、鬼神の力とレギュレーターによる繊細な制御ができて初めて光の刃が出せるのであって

普通のの人や、ウェポンマスター以外の鬼剣士が使うと剣の力が暴走してどうなるかはわからない。

風の噂では剣が暴走を起こして爆発するとか何とか…

詳しいことはまだわからないが。」

「中々使い手を選ぶ武器なのですね。

あ、と言うことは貴方は魔法の変わりにその『鬼神』の力を使うのですか？」

「ああ、そんな所さ。」

「良ければどんな力を見せてはいただけませんか？」

「…俺はその力の大半を今言った武器・光剣に費やしてるからあまり大きな力は使えない。

それでも良ければいいが？」

お願いしますと頼むと、コルベールは興味津々で、ルイズは半信半

疑でその様子を見ている。

ルイズからしてみれば平民にそんな力があるとは思えないと考えているのだが…

逆月は2人と反対側を向き、左手を前にかざし、

グウン…

そこに現れたのはざっと10メートルくらいの長さだろうか。

赤い円陣の中に鎧のようなものをまとった、モンスターのような肩から上しかないものがその佇んでいた。

「これがその力だ。この中にいる限り自身、そして自分が仲間と認めた者だけ僅かに力と精神力を底上げする。」

ますます彼に色々な意味でこの男は危険ではないかと思うコルベール。

しかしその一方で彼は話で物事を解決できる思考力を持っており、なによりミス・ヴェリエールが初めてうまくいった魔法である。

対応の仕方を間違えなければ、彼は比較的大人しいようなので学院長次第かとも考えている。

その一方でルイズはこの使い魔は意外とハズレではないのではない

かと思つていたりもする。

当初はただの平民、それも傭兵を出してしまったと期待が外れてしまつていた。

しかしまったく知らない場所から、それもあれだけ輝く剣を使い戦場を駆け抜けているのであれば、例え平民であつても何とか面目は保てるのではないかと考えている。

「鬼剣士、そしてこの光剣はもういいかな？」

それに、今度はそちらの魔法をある程度教えてもらいたいんだが。さっきの空を飛ぶこと一つ取つても俺がいたところでは無理だった。一時的な滞空くらいは可能だったけど。」

「それは私が説明するわ。その魔法は始祖ブリミルが生み出した力よ。」

「始祖ブリミル？」

「あなた本当に何も知らないのね。」

「俺達がいた所ではそんな話はなかったしな。」

「まあいいわ。ブリミルっていうのは、今から6000年ぐらい前、このハルケギニアに降り立った伝説のメイジよ。神様から、”虚無”と呼ばれる今はもう失われてしまった系統の魔法を授かつて、自分でも火、水、土、風の4つの系統魔法を生み出したのよ。」

「それに自分の精神力でそれぞれ4つの系統を駆使して、様々な魔

法を使うのですよ。

先ほどの空を飛ぶのも風に干渉して空を飛んでいるものですね。」

なるほど。あつちでは光と闇があるが、こつちでは土と風が属性に組み込まれてるのか。

あまり細かい話はここでいい加減に聞くよりも、後々しつかりと聞く機会を設けてもらうべきだろうな。

「あ、ほら見えてきたわ。あれがトリステイン魔法学院よ。」

そこには大きな大きな、とても学び舎とは思えない建物が見えてきた。

剣士は、一縷の期待を込めて歩みを速めた。

力の説明、そして学院へ（後書き）

色々言いたいことはあると思いますがあくまでも解釈をゆるく、何とか辻褄を合わせようとした結果がこれです。

ルイズやコルベールの性格が違う！とお思いでしょうが、一度も原作を読んでいないのでそこはご了承を。

2次創作でこんな性格なのかな？と、試行錯誤して書いております
orz

感想をお待ちしております！

学院長と秘書（前書き）

2 / 1 3 大幅に修正

学院長と秘書

学園長室は本塔の最上階にあり、学園長を務めるオスマン氏は白い口髭と髪を揺らし、退屈をもてあましていた。

テーブルに肘をつきぼんやりと鼻毛を抜いていたが、おもむろに引き出しから水ギセルを取り出す。

オスマンがそれをくわえようとすると、部屋の隅で書き物をしていた秘書のミス・ロングビルがそれを取り上げる。

オスマンはため息をつき心底つまらん、というように呟く。

「年寄りの数少ない楽しみを取り上げて楽しいのかね？ミス…」

「オールド・オスマン、あなたの健康のことを考えるのも秘書の仕事です。」

オスマンは椅子から立ち上がり、ゆっくりとした歩調でロングビルの後ろまで移動する。

「ここも平和な日々が続くと、時間の過ごし方が何よりも問題になってくるのじゃよ。」

この魔法学院で誰よりも長く生きているオスマンでしかわからない

言葉。

「オールド・オスマン。」

だがロングビルはそれを無視する。

「なんじゃ。」

「暇だからといって、私のお尻を撫でるのはやめてください。」

言いながらも仕事の手は全く緩めない。

そんなロングビルをよそに、オスマンは冒険者が混乱した時の様に
ふらふらと歩き始める。

「都合が悪くなったからといって、ボケた振りもしないでください。」

どこまでも冷徹な声で、オスマンがなにをしても動じることなくロ
ングビルは言う。

常日ごろから同じようなことをされて慣れてしまっているのだろう。

そんなロングビルの様子にまたもため息をついた。

「真実はどこにあるのじゃろうな、考えたことはあるかね？ミス…」

「さあ、私にはわかりません。ですが少なくとも私のスカートの中にはないので、机の下にネズミを忍ばせないでください。誤って踏み潰してしまうかもしれません」

オスマンは顔を伏せ、残念そうに呟いた。

「モートソグニル、来なさい。」

ロングビルの机の下から小さなハツカネズミが現れた。

オスマンの足から上り、肩にちょこんと乗っかって、首をかしげる。

オスマンはポケットからナッツを取り出し、モートソグニルの顔の前に置いた。

ネズミはナッツをうれしそうに受け取る。

「気を許せるのはもうお前だけじゃな、モートソグニルよ。」

ネズミはナッツをかじり始め、食べ終わるとちゅうちゅうと鳴いた。

「そうかそうか、もつと欲しいか。だがその前に報告じゃ。
ふむふむ。白、か。しかし、ミス・ロングビルには黒が似合う。
そう思わんか？かわいいモートソグニルよ。」

ロングビルの眉が僅かに気付かぬほど動き、体に何か炎をまとっているように見える。

「オールド・オスマン。今度やったら王室に報告しますよ？」

「カーツ！王室が怖くて魔法学院学院長が務まるカーツ！」

オスマンは目を見開いて怒鳴る。その剣幕はとても年寄りとは思えない。

しかし、やってる事は開き直りである。

「下着をのぞかれたぐらいでかつかしなさんな。そんな風だから婚期を逃すのじゃ。」

「はあ、若返るの。」

オスマンは堂々とロングビルのお尻を撫で回し始めた。初めの威厳はどこへやら、である。

秘書は立ち上がり、無言でオスマンを蹴りはじめる。

その顔は笑っているが目は冷たい。どこかさっ気もあるようにも見える。

「痛い、痛い、やめて、ホント痛い、もうしないから！」

オスマンは頭を抱えてうずくまる。

そんなオスマンにも構わずロングビルはオスマンを蹴り続ける。

そんなある意味平和と言える時間は、来訪者によって終わりを告げる。

ドアをノックして失礼します、と3人が入ってくる。

「何じゃね？今はまだ授業中のはずだが。」

オスマンもロングビルもすでに何事もなかったように仕事をしているた。

オスマンは手を後ろに組み、重々しくコルベールを迎え入れる。まさに早業である。

「ミスタ・コルベール。その方は…？」

「彼は『サモン・サーヴァント』で呼び出された別の大陸の青年で

す。
」

実は3人とも大陸名・建物、町から自己紹介してしまってる。

雰囲気の流れで、異世界から来ている事にはまだ気付いてはいない。

逆月は最高責任者と話ができ、常識的な人間と対談ができると期待する。

しかし、先ほどのあれがまともかと言えるかは…甚だ疑問である。

学院長と秘書（後書き）

はい、先に進むのが遅いかもしれません。

感想などお待ちしています。

11 / 26 修正

交渉

「初めまして、アラド大陸・ヘンドンマイアに住む傭兵の逆月とい
います。今回このルイズという少女に召還されたものです。」

いきなり突拍子のない自己紹介を受けたオスマン学院長とミス・ロ
ングビル。

オスマンも一瞬何のことかと、疑問符を浮かべたがすぐに顔を引き
締めて女性二人に退室を促す。

「スマンが、ミス・ヴァリエール・ロングビルは席を外してくれん
かの。」

ルイズは肝心な話を聞けずやきもきするものの、逆らうわけにもい
かずしぶしぶと。

ロングビルは軽く頷き、如何にも秘書らしくきびきびと退室して行
った。

オスマンは軽く杖を振ると机に座り、逆月に椅子に座るようにと促
す。

一方逆月は部屋の豪華さに見とれたものの、オスマンの声で我に返
り大人しく腰をかける。

コルベールもさり気なく学院長の横に立ち、万が一に備える。

「今この部屋に魔法をかけた。これで聞かれない話なども話せるはずじゃ。」

「今のも魔法なのですか？」

「おや、魔法を知らなかったかね？」

てつきり召喚と話していたからある程度知っているかと思っていたが。」

先手を取られた。

いやむしろ防音にしてくれたのはありがたいことなのだが、言葉から自分を探られるのは落ち着かないものがある。

それにここはまさしくアウェイの場所。いきなり何かの仕掛けがあってもおかしくない。

素直に腰をかけたのは失敗だったかと今更ながらに思う逆月。

実際はそこまで警戒しなくても良いのだが…

「ええ、魔法と言つのは色々便利なものですね。」

「そうじゃのう、ここは魔法学院。これくらいは軽いものじゃよ。」

ほっほっほとニコニコ顔で話すオスマン。

この爺さんは狸だな。

逆月は警戒の度合いを強める。この点はより長く生きているオスマンに一日の長があるようだ。

「では単刀直入に聞きます。私を元の場所に戻せますか？」

「やはり、使い魔になるのは嫌かね？」

「強制的に一生見知らぬ少女に従えと言うのは御免ですね。逆にあなたはできるのですか？」

「わしなら女性に仕えられるのは嬉しいがのう。」

本気とも茶化しているようにも聞こえる。

「はあ…元に戻せるのか否か、聞きたいのですが？」

「結論から言うと出来ぬじやろう。わしは300年以上生きてきたが、そのような魔法を聞いたことがないのじゃよ。」

今までの情報を整理し、オスマンにたずねる。

「確か6000年経っているのですよね？あのブリミルという魔法の創始者から。」

大昔の文献などに載っていたりなどはしていないのですか？」

「確かにその可能性はあるが、一応わしもこの学院の最高責任者で膨大な魔法の種類も研究もしておる。」

そのわしが言うのだから現実的にはないも同然じゃろう。」

本気で自分の身の振り方を考えなければいけないようである。

途方に暮れている逆月を尻目に、オスマンはコルベールに青年のこれまでで得た情報の確認を行う。

ここで色々ところこの常識・物のあり方が違うようであるオスマンは逆月に色々質問する。

「さて。少々君のことを話していただきたいのじゃが。」

もしや、君は東の砂漠を越えた大陸、ロバ・アル・カリイエから来たのかね？」

「そのような地名は知りません。私はアラド大陸の人間ですが？」

「そうかの。聞いたことがない場所なのでそこから来たとはかり…。」

「

ここに来て逆月は一つの可能性・次元の裂け目のことを思い出した。たしかあれは異世界から使徒が来たと言われるものと言われている。もしかしたらここも異世界の一つなのではないか、そんな気がしてきたのである。

そのことをオスマンに話すと、そんな事がありえるのかとばかりに2人は疑問符を頭に浮かべる。

「私のいるところではその世界とは別次元、全く違う世界と言うのが存在するのです。」

コルベールさんに話したあなたこの化け物の話、あれも異世界からの存在が寄生した生き物なのですよ。」

「にわかには信じられないのですが、何か証拠などがありますか？さすがにそのまま鵜呑みにするには少々突飛な物で。」「光剣。あのような剣を人工的なもので作り出すことができますか？」

コルベールは確かにと頷き、オスマンはそれは何じゃと逆月に尋ねる。

逆月は見てもらったほうがいいと、光剣をオスマンの目の前で発動させる。

オスマンはこの剣に驚きコルベールが、一度説明してもらった内容を伝えオスマンも納得する。

少し失礼と杖を振り、オスマンが何か本を読んでいるかのような顔になる。

そして暫くした後逆月に話しかける。

「確かにこのような不思議な金属で出来た、しかも精神力以外の力で具現化している剣など見たことがない。異世界と言うのも確かにあるんじゃないかな。」

「分かっていただけなら幸いです。」

光剣をしまい、これで完全にもとの世界へと戻ることは諦めたほうがいいと思う逆月。

お金や装備が置き去りなのは悔しいものがあるが、お金は別世界で同じ通貨が使えるはずもなく諦めなければいけないようだ。

しかし、装備は悔やんでも悔やみきれない。

ダンジョンや洞窟、森などに行き貴重な戦利品を集めていたのである。

全て無駄になったのはやはりやるせないのである。

「学院長。今回の召喚でミス・ヴァリエールの進級についてなのですが。」

「おお、こつちの話に夢中になっておつた。

それに関しては今から彼と話をあわせたいのじゃが。」

「はい。彼女もこの様な事になり不安がっているでしょう。」

逆月に向き合う。

「君は召喚はされたのじゃが、契約は行つたのかな？」

「いえ、いきなりの事で断りましたが。」

「そうか…それでは逆月君。一つ契約を提案するが、どうかの？」

コルベールにルイズを呼んできてもらう様に頼むと、彼に優しい顔で尋ねる。

「彼女に『傭兵』として仕えるのはどうじゃ？」

交渉（後書き）

少し鬼剣士が疑り深くなっていますが、異世界・住んでいた環境と
いうことでご了承を…

感想お待ちしております^ - ^ b

信賴の嬉しさと夜の冷たさ

意外な言葉が返ってくる。

てつきり使い魔としての契約をしなければ、と条件を付けられると思っていた。

どうやら人として倫理的なものは守ってくれる人のようである。

「傭兵としてならこちらは断る理由はないですね。

元のいた場所に戻るのは確かに厳しい以上、働き口は是非もありませんので。」

「そうかそうか、それは良かったわい。ああ、勿論無理に使い魔の契約をしろとは言わんよ。

ただ、口裏を合わせてもらえれば助かるのじゃが。」

「そうですね、そこまで誠意を見せてもらったのであれば勿論。」

「ふむ、それでは君の出身は先ほどのロバ・アル・カリイエ…東方から砂漠を越えた土地から来た人間だと。

それと無闇に光剣を見せないで欲しいのじゃ、ここでは学生ばかりで魔物はいないのでな。

後はミス・ヴァリエールにその他を調節してくれば良い。」

「出身が東方の砂漠を越えたロバ・アル・カリイエ、そして滅多な

事で光剣を使わない。

他はあのルイズという少女に口裏を合わせてその都度、ですね。

あ、これは雇用主はオスマンさんで良いので？それともルイズになるのですか？」

「勿論わしが雇用する。学生が苦境に立つておるのに上に立つ人間、それも学院長が助けるのは当たり前じゃからの。

それに、ミス・ヴァリエールは君を呼び出しているのじゃから進級にもなる。

これなら誰にも角は立つまい。

ああ、対価はまた後ほど話そう。」

一息ついて、はつきり逆月の目を見て言う。

「それに、君は腕も立つし頭も切れるようじゃしの。生徒を、あの子を守ってくれると思っとるよ。」

俺は人を見る目が無かった様だ。

確かに狸な所はあるものの、それは上に立つ者が必ず持たなければならぬ物である。

しかし、人柄や雰囲気はとても立派。

これならこの人を信じても良さそうだ…

そこにルイズが来て、学院長は今の説明を一通り纏めて説明している。

どうやら今日はもう授業は出ずに、俺とルイズと話し合い・口裏合わせをしておくことになった。

「契約をしてくれないのは不満だけど！私といるときは傭兵としてではなく使い魔としてだけど…
改めてよろしく、逆月。」

「ああ。『コントラクト・サーヴァント』は無理だが、仕事としての『契約』なら。
よろしく、ルイズ。」

二人はルイズの部屋に戻り、色々話し合った。

光剣は無闇に出せない代わりに大剣（何処から出た！とは言ってはいけない）を使うこと。

ちなみに、取り出すときに一悶着あったがそこは割愛。

あくまでも逆月は東方から来た傭兵であり、使い魔として振舞うこと。

戻る可能性は低いものの、オスマンが探してくれるとの事（後でロングビルより連絡があった）。

逆月はルイズを守る。学生が手を出した場合は火の粉を払ってもよし。

ルイズは逆月の力を知っておきたいと頼み、逆月は説明する。

カザン（力と精神力の底上げをする円陣）

波動剣地烈（剣を振り、衝撃波を地面から起こす）

烈波斬（敵を掴み、前方に斬撃の円を描いて相手を吹き飛ばす）

崩山撃（前方に飛び掛り、剣を振り下ろす一撃）

鬼切り（紫黒い残像を残す前方の一撃）

その他、ウェポンマスターで使う簡単な内容を話した。

中には実演しろとの話だったが室内では無理だと伝える。

明日にでも見せると注文を受け、ルイズの時間が空いたときに実演となった。

色々長く話しているうちに闇が外を包む。月が二つあり、綺麗な物である…

「この世界では月が二つあるのか…。」

「月は二つあって当然じゃない！…ああ、貴方は別な世界から来たのを忘れてたわ。」

貴方の世界はいくつあるの？」

「一つだ。改めてここが別の世界というのを実感するよ。」

そういえば、俺は何処で休むといい？ドアの外で休めば良いのか？」

「一応使い魔以前に傭兵だしね、この部屋でいいわよ。
…そろそろ眠くなっただわ。」

そう言うのと、ルイズは上着を脱ぎだす。

「おいおい、俺がまだいるのに裸になるのか？」

「あ…。はっ早く出なさい！！」

「俺は外にいる。終わったら呼んでくれ！」

さすがに女性には慣れていないため、さっさとドアの外に出る。

ルイズは目の前の剣士は使い魔として見ていた為、すっかり忘れていた。逆月はあくまでも平民なのである。

顔が真っ赤になり、枕を投げつける。八つ当たりもいいところだが、女性なら仕方が無いだろう。

「今日はいいい加減くたびれた。まあ、人生はいきなり何があるか分からないもんだしな。」

鬼神に取り憑かれ、人生が変わった鬼剣士ならではの今までの悩み。

しかし別世界に使い魔として行ってしまう苦勞というのは、流石に誰も想像は出来ないだろう。

廊下は静かで、今は暖かい気候なのに、僅かにその場所が冷たく感じた。

元の世界では避けられながらも、それでも周りに見知った人はいた。
今、それすら無い。

それは久々に感じた『寂しさ』なのは、自分でも理解していなかった。

信頼の嬉しさと夜の冷たさ（後書き）

オスマンが教師の鑑になってしまいました。

感想をお待ちしています！

異世界での目覚め

チュンチュン…

外が薄明るくなっている。逆月は昨日用意してもらった毛布を剥ぐと、一伸びして周りを確認する。

今までと全く違う部屋、目の前にいる少女。ようやく異世界にいることを思い出した。

本来ならば軽く剣を振り体を解すのだが、流石に大剣は大きすぎる。

第一ルイズに対して迷惑になるだろう。仕方なく瞑想を行い、鬼神を感じ、体を動かし、力・調子を確認する。

一時間もしただろうか？調子も良く、今すぐにでも戦えるように準備を済ませる。

傭兵として毎日の日課は欠かさず行う。これが出来ずにいるものは、戦場ではいざと言う時役に立たないのは知っているのだ。

太陽もだいぶ上がってきており、そろそろルイズを起こす時間のようだ。廊下では小間使い…メイドといったか、それらが慌しく動く気配がする。

幸せそうな顔で眠っているベッドの主は可愛いものだが、流石に起

こさないと彼女やオスマンに注意されることだろう。

「ルイズ、起きろ。」

声を掛けて起こそうとするものの、起きる気配は全くしない。

「つたく、おい！ルイズ起きろ！」

体を軽くゆすり、大きな声で起こす。

うーん、と覚醒してきているようだ。

「ふあー、って誰よあんだ？」

「寝ぼけているのか？昨日召喚された逆月だ。」

「ああ…そういえばそうだったわね。」

「さて、私は廊下に出るから自分で着替えてくれ。」

「何を言ってるの、あんたは私の使い魔よ。着替えくらい出しなさいよ！」

「俺は使い魔では無い。昨日の説明をもう一度繰り返しておこうか？」

「っ…悪かったわね！んもう自分で着替えればいいんでしょ、着替えれば！」

カッカしているルイズを見ながら、俺は部屋を出る。昨日と同じだな…と思いながらも、廊下で手を組みながら大人しく待つ。

「終わったわ。行きましょう？」

「早いな、了解だ。」

「おはよう、ルイズ。」

別の声が聞こえて振り向くと、燃えるような赤い髪の少女がいた。身長は俺と同じくらい、ダークエルフのように肌は褐色、胸は大きく、顔は彫りが深い。

この少女はルイズと対照的である。顔、身長、体型、その全てが魅力的と言えるだろう。

ルイズは嫌な顔をしながらも返事を返す。

「おはよう、キュルケ。」

「それが噂の使い魔？」

俺の方を指差し、バカにしたような声で言った。

「へえ…体付きは良いけど、ただの平民を喚び出しちゃうなんて、さすがはゼロのルイズね。」

確かに美人だが、真っ向から小馬鹿にされるのは腹が立つものだ。

「私も昨日召喚したわ。誰かさんと違って一発で成功したしねえ。」

「あつそ。」

「どうせならこっちのほうが良いわよね？」

フレイムと少女が呼ぶとキュルケの部屋から、のそのそと真っ赤な体躯を持った大トカゲが出てくる。

「これって、サラマンダー？」

少々悔しそうな声を出しながらも問いかける。

「そうよ、見なさいこの尻尾。ここまで鮮やかで大きい炎の尻尾持つてる火トカゲなんて間違いなく火竜山脈にいたサラマンダーね。プレミアが付いてもおかしくないわ。」

「そりゃよかったわね。」

苦々しくも返事を返すルイズ。…私も小型のドラゴンを倒したことがあるのだが、黙っておく。

「素敵でしょ？私の属性にぴったりよ。」

「あんた『火』属性だもんね。」

「ええそうよ、私は微熱のキュルケ。」

ささやかに燃える情熱は微熱。でも、それだけで男の子はイチコロなのよ、あんたとは違ってね。」

ここのメイジは属性が決まっているのか？これも後々確認しておかないといけないだろう。

キュルケは得意げに大きな胸を、腕を組んで強調するように押し上げる。

ルイズはそれが出来ず胸を張ることで張り合うが、その差は一目瞭然であろう。

「あいにく私は、あんたみたいにいちいち色気振りまくほど暇じゃないの。」

ルイズのそんな負け惜しみのような言葉を聞いても、キュルケは余裕の態度でにっこりと笑い私のほうを見る。

「貴方、名前はなんていうの？」

「俺か？逆月だ。」

「サカズキ？容器みたいね。」

「…よく言われるよ。」

「逆月ね、それではお先に失礼」

彼女は髪をかきあげながら去っていき、その後ろ姿を黙って見送った。

その後をきゆるきゆると可愛らしくサラマンダーがついていつている。

キュルケがいなくなると、ルイズは拳を握り締め、

「くやしー！なんなのよあの女！自分が火竜山脈のサラマンダーを召喚できたからって！！」

「彼女は一体誰だ？」

「あいつはキュルケ・アウグスタ・フレデリカ・フォン・アンハルツ・ツエルプストーよ。
ヴァリエール家の宿敵よ！」

「穏やかじゃないな。まあ誰だって嫌いな奴はいるだろうが程ほどに、な。」

「それなものじゃないわ！いい？あのキュルケの家はねっ、私の家と国境を挟んですぐ隣にあってっ、ヴァリエールの領地を治める私たちとはぜーったい相容れない家系なのよ！！
戦争になれば真っ先に殺し合い。

あいつの家系に殺された私の家系は数え切れないほどいるのよ！
そんなやつらの娘と仲良くしろ？ふんっ。冗く談じゃないわ！！」

「それなら何処にでもあるような話さ。それが国境の国が、隣の家との敷地かの違いだろ？」

「いいから最後まで聞きなさい。

ツエルプストーはいつもヴァリエールの恋人を奪っていったわ。私のおじいちゃんの恋人も、ひいおじいちゃんの恋人も、ひいひいおじいちゃんの恋人も。

そして取られるたびにヴァリエールの名は辱められるのよ！」

なんと言つか、業が深いな。まるで喜劇のような脚本そのままだ。

「すごく因縁があるのは分かった。しかし何時までも話していて良いのか？何処に行くかは知らないが。」

興奮した感情が駄々漏れだがとりあえず食堂にいくわよ、と先に向かうようである。

いやはや、少しは我慢していたもののこの少女は挑発に弱いようだ。…喧嘩屋の挑発を受けたらさぞ猪の様に特攻していくだろう。

因みに「挑発」は格闘家・喧嘩屋のスキルで、攻撃の対象を自分に変え命中率をダウンさせる効果がある。

その姿を想像すると笑えてくるのだが、本人の名誉のために顔をしかめておく事が精一杯であった。

異世界での目覚め（後書き）

PV11000を超えました！クロス元がマイナーなのですが、皆様にこんなにも多く見てもらって感謝しております！

遅々として内容が進まないのですが、それでもしっかり書いてがんばります。

これからもよろしくお願いします。

食堂での1コマ

食堂に案内されると、私は呆然とする。この大きさの食堂など今まで記憶に無いからだ。

ルイズは自分のことのようにフフンと鼻を鳴らす。

「トリステイン魔法学院で教えるのは魔法だけじゃないわ。メイジはほぼ全てが貴族なのよ。」

『貴族は魔法をもつてしてその精神となす』のモットーに貴族足るべき教育を受けるのよ。」

つまり食堂一つにしても貴族に相応しくないといけないのよ。」

「まあ確かに形から入り精神を、と言うのは分かるが。にしても過剰じゃないか？国のエライさん方が来るわけじゃ無いのだろう？」

「いいえ、ここに王女様が学院に来られる時もあるわ。まず滅多には無いけどね。」

わかった？貴方みたいな平民は一生この『アルヴィースの食堂』には入れないのよ。感謝しなさいよ。」

「確かに豪華で一度は来て見たいとは思うな。だが、ここで食事はする気が起きないな。」

一々形式に則って食べるのは性に合わない。」

「貴方は確かにそんな食事は苦手そうね。」

ルイズは席に座ろうとし、私は食堂に二の足を踏む。

昨夜自分が平民としていることで、ルイズと同席での食事はしない方が良いと聞いている。

他の者に要らぬ喧嘩の元を振りまくわけにも行かないのだ。

「ああ、逆月は厨房に行って食事をもらって食べて。あっちなら問題ないわ。」

「分かった、そうさせてもらう。」

人目を気にしながらも厨房へ向かうが、中では料理人とメイドがあわただしく動いている。

丁度そこにメイドの方が来たので声を掛ける。

どこと無く元居た世界の服装を見ているような気がする。確か…アバターと言っていただろうか？

見た目はただの動きにくい服装なのだが、それを着こなすだけで自分のスキルが強化されると言っていた。

…まさかな。

「すまないけど、ちよつといいかな？」

「はい？何が御用でしょうか？」

「ミス・ヴァリエールに此方で、食事を貰って食べるように言われた者なのだが。」

「あ…もしかしてあなたは使い魔召喚で平民を呼ばれた、と言う方ですか？」

「ああ。それで申し訳ないが、何か平民が食べる食事をいただきたいのだが…。」

黒髪のメイドは分かりました、と私をテーブルに着かせシチューとパンを運んでくれる。

食堂で見たきらびやかな料理とは全く違うものだったが、自分としては此方のほうが好みである。

「食器はあその洗い場に入れてください。あと、良ければ名前をお聞きしたいのですが？」

「そういえば互いに名乗っていなかったね。俺は逆月と言います。」

「私はシエスタと言います。サカヅキさん、ですか。失礼ですけど、器の名前のようですね…。」

「今日で2回目だよ、言われたの。」

苦笑しながら返事を返すと、失礼しました！と謝ってくれる。

「色々お話を聞いてみたいですけど、忙しいのでまた機会があったらお聞かせくださいね。」

「分かった。食事をありがとう。」

シエスタはそのまま給仕に戻り、俺はシチューに手を伸ばす。

うまい。あまりシチューは食べたことが無いが、ここの給仕の食事はこんなにうまいのか。

思わず夢中になって食事を楽しんでいると、大柄の被っている縦長の白い帽子と服装の中年の男がやってくる。

「よう、お前さんが貴族どもの使い魔にされちゃった平民か？ 災難だったなあ。」

体格のいい男が近寄ってきてバンバンと逆月の肩を叩いた。

「あなたは？」

「ここの料理長をやってる、マルトーってんだ。よろしくな。」

「初めまして、逆月と言います。突然押しかけて申し訳ない。」

「なあに、メシぐらいだったら幾らでも出してやるさ。」

味も分からねえ貴族のお坊っちゃん様方の貧しい舌に乗せられるぐ
らいなら、お前さんに食べてもらったほうが食材も幸せつてもんだ。
だつはっは！」

人懐っこい、豪快な笑顔である。

「はは…ありがとうございます。」

「いいってことよ。遠慮はいらねえから、ゆっくりしていきな。」

マルトーはひとしきり笑い、厨房の忙しさの中に戻っていった。

残りのおいしい食事をゆっくり味わいながらも食べ終わり、食堂の
外で大人しく待つ。

途中他の生徒たちからひそひそと悪口であろう、私の事を指差しな
がら噂を立てていた。

ルイズが来たところには、表立った噂は無くなったようだが。

これがしばらく続くとなると、正直気が重い。ある意味魔物よりこ
れは厄介じゃ…？

学院での初日からいきなり愚痴りたくもなる逆月であった。

食堂での1コマ(後書き)

ようやく次回から魔法メインの話…かな？

11/30 一部修正済

貴族の心得、少女の悔しさ（前書き）

昨日は時間が無く、投稿できませんでした。

申し訳ありません。

貴族の心得、少女の悔しさ

ルイズに連れられて教室に入ると、生徒の視線が一斉にこちらを向いた。

食堂と同じような、あまり良い感情の込められた視線ではなかった。馬鹿にされているような忍び笑いも聞こえてくる。

ルイズは無視して席に座り、俺は他の者が邪魔にならない場所に立つ。

教室を見渡すとキュルケがいた。男の子はイチコロといていたように、彼女の周りは男子が取り囲んでいる。

しかし、こうやって見ると使い魔というのも多彩な種類が要るものだ。

昨日のドラゴンにはいないようだが、猫、鳥、カエル、この辺は大人しそうだ。

サラマンダーと、言ったか？地上を歩く小型のドラゴン・あれは…モグラなのか？ふさふさした毛が触り午ごちが良さそうである。

因みに逆月は猫・鳩などふかふかモフモフした小動物が大好きである。人の代わりに動物しか懐いてくれなかったのである…。

少々そんなことを考えていると、いかにも魔法使いのベテランと言

えるような格好の人が現れた。

「皆さんおはようございます。私の名前はシュヴルーズ。二つ名は『赤土』。

『赤土』のシュヴルーズです。これから一年、皆さんに『土』の魔法を講義致します。」

シュヴルーズは穏やかな口調で自己紹介をすると、微笑みを浮かべながら教室を見渡した。

「春の使い魔召喚の儀式は皆さん大成功だったようですね。」

このシュヴルーズ、春の新学期に様々な使い魔達を見るのがとても楽しみなのですよ。」

シュヴルーズが教室を見渡し、俺達の所を見て視線が止まる。

「おや、ミス・ヴァリエールはとても変わった使い魔を召喚したものですね。」

その声で教室中で笑いが起こる。中には侮辱するような大声で笑う者もいる。

「魔法成功確立ゼロのルイズ」召喚できなかったからって平民連れ

てきちゃダメだろ！」

「違うわ！ちゃんと召喚したのにこいつが来ただけのことよー！」

「嘘つけ！『サモン・サーヴァント』ができなくて、その平民に
来てもらっただけだろう？」

成程。初日からゼロと呼ばれていたがそういうことか。しかし、俺
を呼び出したからそれは間違っているようだか…？

「ミセス・シュヴルーズ！風っぴきのマリコルヌが私を侮辱しまし
た！」

「風っぴきだと！僕は風上のマリコルヌだ！」

「あんたのそのガラガラ声は風邪でも引いてるみたいなのよ！」

あまり人の事を言えた義理でもないが確かにガラガラ声である。

それを想像した為か、口元が緩んでいたのだろう。つつい笑みが
出ていたようだ。

「おい平民！お前今笑っただろ！平民の分際でよくも僕を笑ったな
ー！」

「これは失礼。確かに他人を笑うのは悪かった。

しかし君も人を、ルイズを馬鹿にしたのだろうか？例え身分が上であってもそれを言うことは出来るのか？」

「なんだと？お前、貴族をバカにしてるだろう。平民がそんな態度とつていいと思っているのか？」

「いや、馬鹿にはしていない。

ただ、上に立つべき貴族がこんな体たらくでは平民も大変だろうと思っただけさ。

第一『貴族は魔法をもつてしてその精神となす』とあるが、精神や魔法以前にその考えを改めないと人から嫌われるぞ。」

ルイズは少々驚き俺を見ている。続けて俺は話す。

「そしてそれが自分への評価にもなり、己の身に戻ってくる。

確かこの生徒はそれぞれの領地があつたな？そこでそんな噂が流れてみる。

住民はその領主・土地を嫌い、人がいなくなれば税金も取れなくなるんだろう。

それを今の自分に当てはめてみる。それでもその態度を取れるのかと逆に聞きたいものだが？」

マリコル又と言う少年はぐうの音も出ずに黙ってしまった。

他の生徒達は黙る者、ぎゃあぎゃああと揚げ足を取るような反論をする者、逆切れして此方に殺気を飛ばしてくる者と様々である。

オスマンから手を出すなどは言われてるが、口を出すなどは言われていないので結構正直に物を言う。

「ミセス・シュヴルーズと仰ったでしょうか？私はルイズの使い魔、逆月と言う傭兵です。

この度は使い魔である以上、主人の暴言に対して反論をいたしました。た。

ここに相手に対して謹んでお詫びを申し上げると共に、授業の邪魔をした私をお許し願えるとありがたいのですが。」

逆月は齒の浮くようなセリフをつらつらと喋る。

以前老人に人から雇われるには、一通り目上の人に対して言葉使いも覚えておけと言われたことが役に立った。

「今の言葉、ここにいる者に何かしら感じるものがあつたのでしよう。」

分かりました。貴方の謝罪をお受けいたします。」

教室が静かになる。他の生徒が何人か俺をキツと睨み、そのまま授業となった。

「さて、ミス・ヴァリエール、魔法の四大系統はご存知ですね？」

「は、はい。『火』『水』『土』『風』の4つです。」

「はい、ありがとうございます。以上の4つに今は失われた系統、『虚無』を合わせて5つの魔法系統が存在する事は皆さんもご存知の通りです。」

こちら辺はコルベールが言っていたことと同じだ。さて何が違うのか…？

「その5つの系統の中で、『土』は、最も重要な位置を占めると私は考えます。」

まあ『赤土』の二つ名の通り、私が土属性のメイジだからという鼻屑は否定しきれませんがね。」

そう薄く笑う仕草は上品なおばさまそのものだった。嫌味な所が無いのでそれはその人の品格なのだろう。

「土系統の魔法は万物の組成を司り、この魔法のおかげで私たちは重要な金属を作り出し、加工できているのです。」

もし土の魔法がなければ大きな石から建物を作り出すこともできませんし、農作物の収穫も今よりもっと手間のかかる仕事になっていたでしょう。

このように土系統の魔法のお陰であなた方は今の生活を送ることができているわけです」

正直眠くなってきた。要は土属性は物質の組成、金属加工、建築学、

農業を行うのか。

何となく錬金術師のロトンを思い出す。彼は前に居た世界で錬金術、つまりこの方面の仕事を生業にしているはずである。

彼がこの世界を見たらどう思うだろうか？化学がほとんど無いような世界では……いや、彼ならここでも化学に勤しむだろうな。

そんなことを考えていると、シュヴルーズは教卓の上にある石に向かって魔法を唱える。

石ころは光りだしピカピカ光る金属に変わっていた。

「ゴゴ、ゴールドですか？ミセス・シュヴルーズ」

キュルケが目の色を変えて立ち上がった。

「いいえ、これは真鍮です。」

なあーんだ、とつまらなそうに腰を下ろす。 清々しいぐらいの現金っぷりだった。

「『錬金』の魔法はこのように、一つの物質を別の物質に変えてしまう魔法です。」

今何も無い所から石を取り出し、しかもその物質を変化させたのか。

ロトンが聞いたら物凄く驚き、その技術をくとなるのが目に見えそうだ。

「『錬金』という名前にもなっているように、金を作り出す事を目的として生まれたこの魔法で最も困難なのが金の製造です。可能なのは、『土』のスクウェア・メイジだけです。私はただの、トライアングルですから」

スクエエア・トライアングル？これは初耳である。

「それでは、折角なので誰かにやってみてもらいましょう。そうですね、ミス・ヴァリエールお願いします。」

突然の事にルイズは焦っているのか、立ち上がらずただもじもじしている。

確か、魔法確立0のコンプレックスがあったな。しかし、ここは私にもどうしようもない。

「あの先生、危険ですからやめておいたほうがいいですね。」

「危険？どういう事です？」

キユルケが先生に説明している。

「ルイズを教えるのは初めてですよね？」

「ええ。あまり実技の成績が良くない事は存じています。

しかし、座学に関しては学年首席であると、非常な努力家である事も存じております。

さあミス・ヴァリエール、気にせずにやってごらんなさい。数多くの失敗から、成功は生まれるものです。」

「いや、あまり、どころじゃ。」

「…やります。」

キユルケが言葉を続ける前に、ルイズが覚悟を決めた顔で立ち上がる。

そのまま教壇のところまで降りて行き、杖を構えた。

「？何故他の者は隠れているんだ？」

「危険。隠れたほうがいい。」

昨日ドラゴンを従えていた青髪の少女が私に忠告をしてくる。

「どづいうことだ？」

「早く。危ない。」

訳も分らず机の陰に隠れる。

「いいですか、ミス・ヴァリエール。錬金したい金属を強く思い浮かべてくださいね。」

必死の顔でルイズは石に向かって呪文を発動する。

「『錬金』！」

瞬間、辺りは光に包まれた。

その後、部屋は阿鼻叫喚。使い魔が暴れ、教室はめちゃくちゃ。

シュヴァルーズが気を持ち直したのかようやく立ち上がると、ルイズに教室の片付けを命じた。

その後は自習。他の生徒は私に対する感情はすっかり忘れてしまったのか、ルイズに罵声を浴びせた後に教室を出て行く。

俺もあれはカバーしきれない。

誰でも涙を流すときはある。ルイズが僅かに涙を溜めていたのは、見ないことにした。

貴族の心得、少女の悔しさ（後書き）

いつもより長いですが、2日分と言つことでご勘弁を…

感想などお待ちしていますゝ

食堂での騒ぎ（前書き）

大変遅くなりました。続きをどうぞ！

食堂での騒ぎ

ルイズと逆月は片付けを行っている。

ルイズは最初逆月に押し付けようとしていたようだが、片付けるための道具の場所を知らない。

しかも、学院というものを知らない逆月に対しては色々常識を教えながら作業をせざるをえない。

結局一通り終わる頃には昼の時間に近かった。

「しかし逆月は本当に学院の事を知らないのね。意外と頭が切れるからその辺も問題ないかと思っただけ。」

「俺だって知らない物は多くある。応用が利くものならそれで済ませるが、学校なんて今まで経験したことは無かったしな。」

それに俺は傭兵だから折角の機会だし、学問も覚えたりするのも新鮮でいいもんだ。

「…少しばかり眠くなっただが。」

「へえ、意外と知識欲が強いのね。」

「知識と言うより情報だな。それに知識はあればあるほどいいもんだ。」

敵の弱点・地形・それに情報と分析力に判断力ををもっていないと

いざと言つときに食いつばぐれるもんさ。」

少々傭兵として変わっている所があるかもしれないが、何でも屋と見れば間違つてはいない。

経験によるその言葉は、ルイズには茶々を入れることは出来ないほど真剣なものだった。

2人は道具を片付け、教室を後にする。

食堂に行くと言うルイズに付いていき、不意に立ち止まるとルイズは逆月に話しかける。

「そういえばさっきの教室での言葉、ありがとうね。」

「何がだ？」

「あの、からかうあいつに対して私を庇ってくれて。」

「…何か勘違いをしていないか？」

俺は学び舎として当たり前の事を教えているはずの場所であんな事を言う子供が少々気に食わなかっただけさ。

オスマンから『傭兵として』金銭を貰うのだから、依頼には行動で応えるさ。」

「それでも、ありがとう…。」

それきり顔をそらし廊下を歩くルイズを見て、頑固だったこの子も少し態度が柔らかくなったかな？と、少しほっとする。

雇われている身としては気持ちよく仕事が進められれば、それに越したことは無い。

まあだからと言っていきなり俺をこんな所に送り込み、無理やり洗脳まがいのことをしようとした事は許すことは出来ないのだが。

食堂に來ると、ルイズはテーブルに着き、逆月は厨房に行き、それぞれ昼食を取る。

逆月はマルトーにお礼を言つと、さつさと廊下で待とうと思つたが少々騒がしい。

どうやら今朝厨房を案内してくれたあのメイドに、さつき教室に居た派手な少年が何か言っているようだ。

少々聞き耳を立てる。

ギーシュというらしい少年がが落とした香水を、黒髪のメイド…シエスタだったな。彼女が拾い、それが元で彼女と二股を掛けた事がバレた責任を押し付けている。

まあ元の居た場所でもそんなことは良くある事なので、それ以上は野暮かと思つた。

しかし彼はそれを償えと、責任を取れと言つ。しかも他の少年たち

も無闇にはやし立てる。

流石にこれはまずいか？と思った矢先にルイズが会話に入ってきた。

「ギーシュ、あんた幾らなんでもそれは無茶苦茶じゃない！いい加減にしなさいよ！」

「へえ、ゼロのルイズは口出しするほどエライのかい？僕は彼女への愛を教えてあげているだけさ。」

それに使い魔も満足に召喚できない、そのメイドにも劣る非常識な君には余計なおせっかいさ。」

「別に召喚と注意はは関係ないわよ！それに、あんたは自分の不始末を平民に押し付ける『貴族』なのかしら？」

ルイズとギーシュは喧々囂々（けんけんごうごう）と言い争っている。

どう考えてもルイズが正しいのだが、ギーシュは薔薇：杖？を手に持ちルイズに実力で言い分を通そうとしている。

「そこまでしたらどうだ？いい加減見苦しいし、それに君が原因なのだから君が謝れば済む事だろう？」

まあルイズはお節介ではあるが、君に教えてくれたただけだ。むしろ感謝すべきだろう。」

「…君、どこかで見た事があると思ったなら思い出したぞ。さっきの

授業にいた、ゼロのルイズの使い魔だな？

君もルイズが召喚しただけあって非常識のようだ。君もお節介に過ぎないからさっさと去りたまえ。

それとも君も実力で退けようか？」

「ふう、君は相手の実力を測ることも出来ないようだ。頭に血が上っただけで満足に戦うことなど出来んぞ。」

相手を子ども扱いし、相手を挑発してしまったか？

まあこんな事で引つかかればこの子はその程度なのは言わずと知れた事である。

「…いいだろう、君には貴族の礼儀というものを教えてやるよ。ちようどいい腹ごなしになる。

決闘だ！」

ギーシュは見事に引つかかった。ここの学院の子供はよほど挑発に弱いらしい。

私もここに居る間は喧嘩屋のスキルが使えるのではないかとも思っ
てしまう。

「やる気は起きんが…で、何処でやるんだ。まさかここでやるのか？」

「まさか。貴族の食卓をお前みたいな平民の血で汚せるか。ヴェストリの広場と言う場所がある。そこらに居る奴に聞けば分かるだろう。」

ギーシュと友人たちはテーブルから立ち、去っていく。

そのうちの一人がまだテーブルに残っている。逃げないように見張っているようだ。

「ちょ、ちよつと逆月！あんた何してんの！？」

「間違いを注意したら決闘を申し込まれた。」

「間違っていないけどあんた馬鹿！？何で勝手にギーシュと決闘の約束なんかしてるのよ！

メイジに勝てるわけ無いじゃない！」

「仕方が無いだろう。君がそもそもお節介を焼かなければこんな事にはならなかったのだから。」

確かにその通りではある。しかし、ルイズはギーシュが貴族として間違っていることを正したかっただけであるのだ。

「仕方が無いじゃない！誰も彼女を助けようとしないうし、そもそも平民は貴族に齒向かえないのよ！」

「やっぱり階級制度の弊害はここに出るわけか…。」

「んな事言っていないで、どうするのよ！ギーシュはドットとは言えメイジ。」

「1対1だと平民じゃ逆立ちしても勝てないわよ？」

「おいおい、俺は亜人を討伐しているのを忘れたか？」

「少し力を探ってみたが、今まで戦ってきた敵に比べれば大して脅威でもないしな。」

「はつきりと言い切る逆月は残った少年に待たせたな、と案内を促す。

「あ、あんたちよつと待ちなさいよ。光剣は使っちゃいけないのよ？どうすんのよ！」

「広場に向かう逆月に小声で話しながら付いて行く。

「忘れたか？俺はもう一つ武器を持っていることを。

「まあ、脅しくらいにあの剣を見せてもいいがな。」

「逆月は僅かに威圧感を出すと、ルイズは何も言えなくなる。そして広場に着いた。」

「諸君！決闘だ！」

食堂での騒ぎ（後書き）

次回は戦闘！

ペースが落ちてきているので、もうちょっとスピードを速めていきたいです。

異世界の初戦闘（前書き）

戦闘開始！…描写が少なく、申し訳ないですorz

異世界の初戦闘

ギーシュの高らかな声にウオー！周りが歓声を挙げている。

「ギーシュが決闘するぞ！相手はルイズの使い魔の平民だ！」

誰かが言い出したその間にも、野次馬の生徒はどんどん増えていく。

噂を聞きつけてきたのだろう。私たちの決闘を楽しみにしているようだ。

「ギーシュが決闘だぜ！相手はルイズの使い魔だつてよ。」

「勝てよギーシュ！貴族の力を見せ付けてやれ！！」

ギーシュは野次馬の連中に手を上げて応えているようだ。意外と様になっている。

外野は噂を聞きつけてきたのだろう、俺達の決闘を楽しみにしているようだ。

「よく逃げずに来れたな。その勇氣は誉めてやろうじゃないか？」

少々苛立ちを抑えながらも俺を挑発している。

薔薇：杖を弄びながらも平静を装っているようだが、このような事は経験が無いのだろう。

まだまだ俺の目は誤魔化せない。その証拠に手が僅かに震えている。

「一つ確認したいのだが。」

「何だい、今更謝るのかね？負けを認めるのなら土下座の一つでもしてもらおうか？」

怒りと虚勢を混ぜたような顔で逆月に指をさす。

「いやそんなことではない、この決闘のルールだ。

古今東西様々な決闘方法があるが、ここではどのようにするのが気になるのでね。」

「…いい度胸だ平民。ルールは相手に参ったと言わせるか、意識をなくさせれば勝ちだ。

あとはまあ、君にはないが杖を落とせば勝ちというのが決闘のルールだ。

僕は『青銅』のギーシュこと、ギーシュ・ド・グラモンだ。

君に言う必要なんかないんだけどね、これも一応礼儀だからな」

ギーシュは薔薇の杖を振るうと、騎士の鎧のような物が出てくる。背丈は私より若干低いくらいか？

しかしあれは以前戦ったことがある動く甲冑（アラド大陸での天城というエリアで出てくるエクスペラーなど）によく似ている。

：しかし、それぞれのパーツがやや単純に出来ているようだ。確か青銅、と言っていたか？

これなら切れないと言うことも無く、十分に戦えるだろう。

「僕は魔法使いだ。だから僕の魔法、青銅のゴーレム『ワルキューレ』に君の相手をしてもらう。

先に言っておくけど、僕は手加減など経験が無いのでね。

間違つて大怪我させちゃうかもしれないけど、許しておくれよ？」

ギーシュが杖を動かすと、ワルキューレと呼ばれるゴーレムは連動する。

成程。杖がないと負けると言う意味はそこにもあると言う訳か。

「了解だ。俺も改めて自己紹介をしておこう。

俺は傭兵の逆月だ。そうだな、二つ名ではないが『ウェポンマスタ―』と呼ばれている。」

「ふん、魔法が使えないから武具を使って戦うわけか。

それにしてもウェポンマスターとは、大仰な名前だな。それに何処に武器を持っているんだい？」

「言われなくても出すさ。ほら、これが俺の獲物だ！」

逆月は懷に手を伸ばすと、明らかに隠し切れないはずの身の丈ほどもある長く大きな剣が出てきた。

周りは何処から出した？あんなもの振るえる訳が無いだろう！と口々に騒ぎ立てる。

因みにこの剣は刀身が紫色で出来ており、よく使っている得物である。

「い、今何処から出した？それにそんな長い剣など振り切れるわけが無い！」

「喧しい。さつさと始めたらどうだ？こっちは待ちくたびれているんでね。」

「だ、黙れ！それ以上喋るなっ！
行けワルキューレ！奴をこれ以上喋らせるな！」

さて、羨が悪い子供には身を持って反省してもらおうかね？

…その頃、塔の最上階・オスマンが居る学院長室にミス・ロングビルが来ていた。

オスマンはモートソグニルを机の下に忍ばせていた所に急に来た為、冷や汗をかきながらも勤めて平静に話しかける。

「どうしたのじゃミス・ロングビル？今は休憩じゃぞ？」

「はい。ヴェストリの広場で決闘が行われているようです。

大騒ぎになっていて止めに入った教師も生徒たちに邪魔されてしまい、場を抑えることができていません。」

「暇な貴族ほどたちの悪い生き物もおらんのう…それで誰が暴れるんじゃ？」

「一人はギーシュ・ド・グラモン。もう一人は昨日呼び出されたオールド・オスマンが雇った逆月という者です。」

昨日生徒に手を出さないようにと念を押したはずじゃ。彼はそう簡単に約束は破ると思えなかったしのう…？

「因みに発端は？」

「はい。どうやらギーシュ・ド・グラモンがメイドに難癖を付け、それをミス・ヴァリエールと逆月がいさめた所、頭に来たのか決闘騒ぎに発展したようです。」

オスマンは悩みつつ、さり気なくモートソグニルを自分の所に戻るようにするとため息を一つ。

あのグラモンとこの馬鹿息子、か。あやつの父親も色の道でなら剛の者じゃったし、どうせ女の子の取り合いじゃろうて。

「教師達は『眠りの鐘』の使用許可を求めています。」

「なにを言っておるんじや。たかが子供のケンカに秘宝を使う必要があるか！放っておいてもよろしい。」

「分かりました。では失礼します。」

ロングビルはオスマンに一礼すると学院長室を出て行った。

「どうやらやむを得ない決闘のようじゃが、これは彼の力を見るいい機会でもあるのう。」

万が一危なくならんようにコルベール君に頼んでおこうかのう。」

確かにこんな事で秘宝は使えんが、コルベールに頼んでおけば万が一にも大丈夫じゃろう。

それに：今まで初めて人間が召喚された使い魔（オスマンは人として見ている。念のため）がどれだけ強いかも知っておくべきじゃろうしな。

広場では静寂が流れていた。

ルイズや興味本位で見っていたキュルケを初めとした群集、ドラゴンを使い魔にしている青紙の少女やギーシュ自身も目が離せなかった。

逆月は片手で、あの剣・大剣一振りでワルキューレを真つ二つに吹き飛ばしたのだ。

「おいおい、思ったよりも脆いもんだ。俺が知ってる物はもっと頑丈で強かったが？」

大剣を片手で持ち、いかにも大した事が無いと逆月はため息をつく。見た目通りの装甲の脆さに少々拍子抜けしたのであったが、ギーシュは未だに呆然としている。

ルイズはようやく我に返り、昨夜の事を思い出していた。

逆月の光剣は見ていた物の、大剣の实力はおまけ程度だと思っていた。

ところが実際は、あの重そうな大剣を軽々振り回し簡単にギーシュのゴーレムを倒してしまった。

逆月は光剣を使うのがメインの傭兵だとばかり思っていたのだが、
どうやら大分力もある剣士のようなのである。

キュルケはあの平民やるわね、とそれと同時にモノにしたいと意気
込む。

青髪の少女は本に目を落とすものの、逆さまになっていて逆月を見
ていることがバレバレである。

ギーシュはようやく我に返り、激昂しながら薔薇の杖を振りながら
その花弁6枚が同じワルキューレになる。

「たかが平民の癖に…いけえ！あいつを叩きのめせ！」

残り6体が一斉に走り出し、槍を、盾を使い襲い掛かってくる。

こりゃ尚更エクスペラーにそっくりだ。

そう、思いながらも逆月は大剣を横風。そして両手で袈裟切りにす
る。

6体のうち3体がまた真つ二つになり、1体が斜め上半身が吹き飛
び動かなくなる。

残りの2体が突進してくるのを確認すると、バックステップしながら
真一文字に一体を叩き割る。

最後の1体はアップスイングで打ち上げつつ空中で剣を下に向け、ワルキューレが叩き落ちると同時にその胴体に体重を乗せた剣を串刺しにして止めを刺す。

この間10秒にも満たなかっただろう、ワルキューレが全滅したのは。

「こ、こんな馬鹿な…。」

「覚えておけよ、上には上が居る。まして、お前は自惚れ、挑発に乗り、相手の力を見抜かなかった。それじゃ戦場では…死ぬぞ?」

逆月はギーシュに突っ込んで目の前に立つと、懷から光る剣を取り出す。

光る刃で杖を切り、首元に突きつけ少し殺気を出して話す。

周りにはあの剣は何だ!?とかあいつはメイジだったのか?などと憶測が飛び交っている。

しかし私はそんなことは無視して目の前の少年を睨む。

「まだ続けるか?」

「ま、参ったよ…だからやめてくれっ!」

ギーシュはその場に崩れ落ち、俺はそのままルイズの所に戻る。

周りは未だに信じられないと話していたり、あいつはメイジ崩れなのか？と逆月を凝視する。

「終わった。さて、今から何をするんだ？」

さらっと言い切る逆月にルイズは興奮して話しかける。

「何をする、ってあんた何よ！そんなに強かったの！？」

「だから俺は大丈夫と言っただろう。それにあの光剣を使って杖を叩ききっておいた。

相手の心を折り、実力差を見せた。戦場に比べれば穏やかな処置だっただろう？」

「でも光剣まで使わなくてもよかったでしょ！？」

「なに、さっき思い出したが『生徒に使うな』とは言われたけど『物を切るな』とは言われていない。

それにこれは正当防衛だしな。」

「…にしたってその剣は目立つのよ！。さっさと部屋に戻るわよ。」

出力を切り2つの剣を懷に戻すと、そそくさと2人はその場を離れる。

「眠りの鐘は必要なかったのう……このままでは要らぬ噂やちよっかいを出す輩が増えるじゃろう。

あの子達を一度呼んでおかんな。」

決闘の様子を見ていたオスマンは一度話しておくべきだと、ミス・ロングビルにあの2人をここに呼び出すように連絡を入れる。

「しかしあそこまでは言わんが、一度は厳しく貴族の子供達を育てなすべきかのう？」

異世界の初戦闘（後書き）

ようやく1つのイベントクリアです。

これからもよろしくお願いします！

キユルケとタバサ

「彼はやはり只者ではありませんね、昨日教えてもらった『鬼神』の力も全く使いませんでしたし。」

何より彼の實力はギーシュを『子供扱い』出来るほど。あとこれは個人的な感想ですが、少々好戦的な氣が有るようにも見えますが。」

「その通りじやろ、彼はそもそも傭兵なのじやから。」

本来なら間髪入れず即殺していた所を、武器破壊と背夢説明付きの会話だけで抑えていたようじゃしの。

まあ、その辺も今から確認しとけばええ。」

『遠見の鏡』で見ていたオスマンと、直接自分の目で見ていたコルベールは学院長室で話し合う。

オスマンは樂觀的に、コルベールはやや不安げな表情を見せながら2人が来るのを待つ。

「すごいじゃない貴方！あの動き、あの2種類の剣、只の平民ではなかったのね！」

「…貴方は何者？」

広場を離れ、少し先で声を掛けられる。

振り向くと今朝会ったキュルケと、爆発の時に注意をしてくれた青髪の少女が居た。

「キュルケ、とその子は？ルイズ。」

「彼女はタバサよ。あのドラゴンを使い魔にしてるのを見てたですよ？」

「ああ、あれか。」

思い出した。確かにあの時の少女でもあるようだ。

「私、貴方に惚れちゃったわ。ダーリンと呼ばうかしら？もし良かったら私とデートでもしない？」

「何言つてのよ！私の使い魔に色目を使わないでよね！」

ルイズは必死に抗議する。まあ、折角召喚した私をライバル？に渡すのは嫌なのだろう。

男はイチコロと言っていた彼女が、強いだけでここまで態度を改めるとは…。

正直酒場でならそんな話も良いのかもしれないが、スタイルが良くても学生に言われてもケツの青いガキにしか見えない。」

此方はダークエルフと言う種族がが身近に居る為に、グラマラスな女性は慣れている（人間から見ると彼女のようなスタイルばかり）のだ。

「女性の誘いは有難いが、お断りする。」

そんな事を言うなら君の使い魔もルイズに貸してやるのかい？」

「あら、つれないわね。それにそんな事を言われたら確かにそれは出来ないわ。」

「そうだろう。男漁りもいいが、ほどほどにしておけ。」

「ざまあないわね。私が召喚したんだもの、あなたに靡くわけないじゃない！」

ルイズはエヘンと両手を腰に当て、威張っているように体を反らす。キウルケが肩透かしを食らったように肩を竦めると、代わりにタバサが前に出る。

「…さつきも言ったけど、貴方は何者？そんな光る剣や長く、重そうな剣を扱えるなんて。」

「何者と言われても傭兵で、剣士の逆月だ。光る剣については内緒

だな。」

「…貴方は本当に平民なの？あんな動きや、何か魔力とは違う何かを感じたけど。」

「ノーコメントだ。俺の事を詳しく聞きたいならルイズに言え。」

「そう…。」

無表情のように見えるが、少しばかり残念そうにしているのが見える。

俺も仕事ではペラペラ喋るのは嫌いなので、説明が必要な場合のみ他人に話す。

「悪いけど、詳しいことは離せないわ。それにこんな所で説明するのも嫌だしね。」

取り敢えず教室に戻るわ。あんな騒ぎの中には居たく無いし。」

「あらそう、でも諦めないわよ。貴方を私の物にするまではね。」

「そんな目線を何人の男にしたのやら。子供は子供らしくしてろ。」

妙に艶っぽい目線で俺に話しかける。まあ確かに俺も男だから悪くは無い。

しかし、大抵この手の物は碌な事にならない為さらっと流す。

「ふん！さっさと行くわよ！」

「了解、では失礼。」

「私の色気が通じないなんて、中々強敵ね。彼を落とした時はさぞ快感でしょうねえ…。」

「…彼の言う通り。少しは自重するべき。」

「あら、私がそんな簡単に諦めると思った？私は『微熱』のキュルケよ。

今は温度が低くとも、徐々に熱く激しく恋を燃やすのよ！」

キュルケはやはりキュルケである。まあ、タバサもそれは重々承知なのだが。

教室に2人が戻るとミス・ロングビルが待っていた。

「探しましたよ。いきなりで悪いのですが、2人とも学院長室に来てもらえるかしら？」

「ほら、やっぱりまずかったのよ！あの剣を使ったのは。」

小声で逆月に注意する。しかし、逆月は何処吹く風である。

「さっきの件ですか？まあ、こっちとしても訳があるので問題ないですが。」

「では此方に。」

そのまま3人は学院長室に來ると、ロングビルは退室していった。

「失礼します。」

「入りなさい。さっきの件でちょっと聞きたいのじゃが……。」

そこにはオスマンとコルベールがいる。また昨日のようになるのかと少々辟易する逆月である。

キュルケとタバサ（後書き）

中々書き溜めが進まないだちけんです。

まだまだ続きます。

後始末とこれから

「成程。逆恨みをされたので『止むを得ず』決闘に応じたのじゃない？」

「ええ、『止むを得なく』戦わざるを得なかったのですよ。それに駄がなっていない子供に『注意』しただけです。」

言葉としては特におかしな所は無いのだが、雰囲気はどこか白々しさが見えるのは気のせいではないだろう。

コルベールは腹芸と分かっていたが、ルイズは緊張してその様子を見ている。

「しかし、あまり大きな騒ぎになると此方としても困るのじゃが…。」

「ええ。それは重々承知なのですが、ここの生徒はどれも『魔法のみ』教えているようで。」

『学び舎』として十分な勉強を教えられていないのではと、少々身を持って教えて差し上げました。

実践方式ですが。」

どうも見てみると、貴族の子供達は身分を差別し、平民を人として

みていない所がある。

これでは大人になった時には傲慢で、少なくとも自分の知り合いとしてはお断りしたくなる人物になるだろう。

オスマンとコルベールは顔を見合わせる。ルイズは自分に思うところがあったのだろう、下を向いて考え事をしている。

「いやはや、全くその通りじゃ。教師として恥ずかしい限りじゃない。」

「はい、確かに貴族の子供達を少々過保護にし過ぎたようですね…。」

「まあそれは追々にして、光剣は私も行き過ぎかとは思っています。しかしあの手の輩は懲りずにちょっかいを掛けてくるのが目に見えるので、ガツンと一発釘を刺しておきました。これでおあいこに…無理でしょうかね？」

「いや、『躰』に関してはワシらの責任じゃ。じゃから今回は特に何もペナルティは無しにしようかの。」

「お気遣い痛み入ります…後特に無いですかね？」

「ああ、もう戻ってもいいよ。ヴェリエールも次の授業に行きなさい。遅刻に関しては今回は不問にしますので。」

「わかりました。では逆月、行きましょう！」

「ああ。それでは失礼します。」

オスマン以外の3人は学院長室から出て行く。そこに入れ替わりでロングビルが入ってくる。

「おや、お話は終わったのですか？ オールド・オスマン。」

「ああ、ロングビルは仕事を続けてくれんかの。」

「分かりましたが、足元のネズミは殺しても良いですよ？
どうも私が部屋に來ると知らないネズミが沸いてくるようですし……」

杖を軽く振ると、ネズミが浮き上がってくる。

「やめてくれんかの？ それに、たまたまそこに居ただけで……。」

「そうですね、『たまたま』居たのであれば外に居ても問題ないですよね？」

そう言うと、杖で窓の外にネズミを放り捨てる。

「や、やめてくれー！」

逆月の前では立派な学院長でも、ロングビルの前ではただのエロジジイになるのはお約束と言うものであるう。

「言質を取ったから、これで問題は無いだろう。」

「それでも、明日から貴方に色々と喧嘩を吹っかけてくる生徒が多くなるわよ！

今日みたいにあまり騒ぐのは勘弁願いたいわよ。

まあ、昨日言っていた力を見せてくれたのは良い事だけど。」

因みに、その日の授業が終わった後に人気の無い所で以前言っていた鬼神の力を少し披露していた。

カザン・波動剣地烈・烈波斬・崩山撃・鬼切りなどである。

純粹な剣技もあれば、鬼神の力をもろに使う技もある。ルイズはそ中でもカザンを特に興味を持っていたようだ。

その中にいると少しだけ精神力が上がり、魔法が使えるかも！と言っていた。

実際に使ってみるとやっぱりというか、爆発しか起きていなかったのは余談である。

それはさて置き、ルイズは寝巻き姿で明日以降の身の振り方を伝え

る。

「なるようになるさ。それにもし喧嘩を売ってきたらそれは本人の責任さ。」

それに、今日のようになるのは目に見えるだろ。」

「まあ私としては貴方が強ければ此方としても鼻が高いけどね…。」

「俺は『雇用主のオスマン』に雇われているだけだ。それ以上はあつちの責任。」

こっちは着のみ着のまま、道具も満足に無い。明日からも一生懸命勤めるだけさ。」

逆月は毛布に包まると壁に背を預けて目を瞑り、ルイズも会話がなくなりそのままベッドに横になる。

まだまだこれから大きな事件にも巻き込まれていくのだが、逆月は一時の安息を求め、眠る。

後始末とこれから（後書き）

少々内容が薄いです。

これからどうやって動かしていこうか悩む逆月でした。

感想などお待ちしています。

襲撃（前書き）

PV5000突破しました。これも読んで下さった皆様のお陰です。
本当にありがとうございます。

襲撃

「ルイズの使い魔だな？貴族がお前に負けることがあつてはならない！」

あの時は1対1で戦っていたからギーシュは負けた。だが僕達が大勢でかかれれば倒せる！

覚悟しろ！」

ギーシュとの決闘から早3日ほど経った。ギーシュはあれから他の杖を契約して何とかしているとルイズから聞いた。

あの時見ていた他の貴族達は納得が行かないのだろう。あの日以来、引っこ切り無しに逆月に決闘：喧嘩を仕掛けてくる。

しかし生徒達は肉弾戦ではなく真正面で詠唱するために、はつきり言つて隙がありすぎるその時間を逆月は無駄にはせずに仕掛ける。

「…烈波斬！」

「うわー！」

学生達の目の前に瞬時に近づき、鉄の棒で近くの1人を目の前に切り出し、前方で円を描く鬼神の力を繰り出す。

詠唱途中で無防備の所に他の生徒達が散らばり、全員のされてしま

う。

因みに生徒に剣は手加減しにくい為、オスマンから錬金で手ごろな長さ・頑丈さを持つ鉄棒を作ってもらっていた。

他にも迷惑代の代わりに、自分の持つ光剣・大剣にオスマンが『固定化』を掛けてくれた。

初めに聞いた時は耳を疑ったが、内容を聞いてこれで武器の点検を軽減できると喜んだものである。

オスマンからも折角なので逆月に「生徒を『躰けて』やってくれ。方法は大きな怪我さえなければ良い」と言われている。

そこで生徒が襲ってきたら酷い怪我をさせずに、叩きのめすやり方を取った。

しかしこの生徒は相変わらず挑発にも弱く、何より協力をしないで来るために簡単にあしらえるのであった。

「しかし、これならおおっぴらに実戦経験も積めて俺の運動不足も解決できる。

どっちにとってもメリットはある…が、少々こっちにとってはいい迷惑だな。」

目の前にはもうお馴染みになってしまった倒れた生徒の山がある。

その後ろで逆月はため息を付きながら残った生徒にさらに挑発を仕

掛ける。

「くそう…なんて強さだよ、あの平民は。」

「そういえば、貴族と言うのは平民のような弱者を一方的に蹴るのが常識なのか？」

俺は幸いお前達よりに対抗できるが、他の者は中々それは無理のはずだ。

お前達に言えるのは弱者を、平民の立場をもう一度よく考えるんだな。

お前らの服を、食べ物、道具を作ってくれるのは誰だ！平民だろうが！」

「うるさい！平民は貴族に仕えるのが常識なんだ！貴族は平民よりも優れてるから貴族に尽くすのが幸せなんだ！」

「まだそんな寝ぼけたことを言っているのか。お前は魔法だけが平民より優れているだけだろう！」

平民のように一人で生活できるのか？一人で何でも出来るのか？出来るならそんな言葉は絶対に出ないはずだ。つまりお前らは貴族と言っものを分かっていない！」

それを言ったすぐ後に、残った生徒を鉄棒で払い、時には徒手空拳で抵抗をさせなくする。

ようやく魔法が飛んでこなくなる頃には、周りは生徒の屍（死んではいない）で埋め尽くされていた。

その逆月の背中に鎌鼬が飛んでくる。

「ぐっ!？」

「平民が少々でしゃばり過ぎですよ？それに此方ではそれが常識。あなた方の居た地域とは訳が違います。」

それに貴方はやりすぎた。よって、制裁させてもらおう!」

背中に一撃を受け、血が流れてくる。

「お前も教師か？」

「いかにも。私の名はギトー、風のスクウェアです。私も貴方が気に食わないのですよ!」

そういうと、杖を振るった瞬間3人に分身する。

「貴方にこの『偏在』は勿体無いですが、全力で行かせて貰いましょう。」

「ここの学院は生徒に人として、貴族としての心を教える教師までもがそんな考えか。」

逆月は残念であった。オスマンは人を教え、導く者として尊敬すべ

き相手なのに他の教師はこの有様なのか。

しかし、今はそんなことを考えている場合でもない。目の前に風が、空気の塊が襲ってきているのである。

ドン！

スパスパッ！

ズバッ！

逆月は急所をガード出来たものの腕を、腹を、頭を、足を切り傷だらけになっていた。

この教師にはこの棒では無理だ。光剣を使うか…。

鉄棒をしまい、光剣を懷から取り出し、刃を出し、ギトーに構える。そしてギトーは逆月を中心に周りに陣取り、今にも襲い掛かろうとしている。

「エア・ハンマー！」

逆月は自分にスキル『不屈の意志』を使う。

不屈の意志は自分が技を繰り出している時に、途中で邪魔を受けて

もそのまま技を強引に繰り出せる能力である。（本来は魔法などの詠唱がその効果の対象です。）

「居合い！」

風は逆月に当たり、鮮血が飛び散る。しかし逆月も3人全員を目にも見えぬ速さで胴を薙ぐ。

逆月は直ぐに即効性の回復アイテム・ポーションを使い、即座にギトーを見る。

ギトーは光剣の『居合い』を受けたため偏在が消え、本人は体が痺れて動けなくなっていた。

「あんたも、オールド・オスマンにもう一回貴族とは何かを聞いておくんだな。」

ギトーは苦虫を噛み潰した様な顔を見ると、そのまま倒れた。

後ほど聞いた話だが、ギトーすら倒したと言う平民の噂が学院中に広まり、逆月に決闘などを仕掛けてくる輩は激変した。

オスマンは自分が言い出したこともあって、後ほど他の生徒・先生達に貴族としてのあり方、理念を説いた。

少々勘違いしている生徒が居たものの、何とか逆月に対して襲い掛かることを禁止することは出来た。

まあ、それでも闇討ちなどはあるのだがそれはまた別の話。

因みにそれを知ると、ルイズは自分の（呼び出した）使い魔がこれだけのことが出来るのに、自分は何故爆発しか出来ないのかと。

逆月に八つ当たりをし、それを注意する。

そんなサイクルがここしばらく続いた。

「このひねくれたじゃじゃ馬もそれなりに悩みはあるんだろうが、同情はしない。

どれ、今日も廊下で寝るかね。」

ルイズは同居人を今日も癪癪で追い出してしまっている。

逆月は廊下で毛布に包まり寝ようとするが、そこに隣の部屋から…確かサラマンドーといったか。その使い魔がやってくる。

「？俺に用なのか。まったく、鎖を引っ張るな！」

フレームと言われている火のトカゲはこっちに来いとばかりに部屋に誘導する。

「キュルケが呼ぶのか、碌な事にならんだろうが行ってみるか。」

ルイズに追い出されている今、暇つぶしも兼ねてキュルケの部屋に向かう。

襲撃（後書き）

今現在原作を読んでいる最中ですが、中々進んでいないことが判明。
もっとテンポ良くがんばります。

感想などお待ちしています。

夜と朝

キュルケの部屋に入ると中は真っ暗であり、サラマンダーの周りだけがぼんやり明るい。

「扉を閉めてくだらない？」

逆月は阿修羅（鬼剣士の職業の一つ。盲目になる代わりに波動と言う力で周りを把握できる力を持つ）ではないので、暗い所が分かるわけではない。

そのまま開けっ放しも悪いと思い、素直に閉める。

「こちらに来てくださる？」

「悪いが、暗くて良く見えないな。何か明かりは無いか？」

パチンと指が鳴ると、部屋にある蝋燭が灯っていく。自分の手前にある蝋燭から、最後にキュルケのところの蝋燭が灯る。

ぼんやりと淡く光るベッドに、まさに相手を悩殺する格好で腰をかけていた。

あれはよく娼婦が着けている服か。薄い布をまとっただけのキュルケは、確かに欲情を掻き立てられる姿だ。

「そんな所に居ないで此方にいらっしやいな。」

別に何かされる様子も無いので素直に傍に行く。

「どうぞ、座って?」

「何の用だ?」

「あら、素っ気無いのね? 私がこんな格好でいるのに貴方は何も感じないの?」

「ああ、『そつちの』お誘いだっただか。しかし、俺はお断りさせてもらうよ。」

戦闘ではエスコートは出来るが、夜のお相手は不得手なのでね。」

逆月はキュルケの裸に近い格好を見ても、特に何を思うでもなくその場を去ろうとする。

「つれないのね。貴方は男のほうに興味おありかしら?」

「いいや、確かにその格好は男としては興味が無いわけが無いさ。」

「じゃあ...。」

「悪いが、ここ連日生徒や教師に襲われ続けていたんでね。君もそ

の人間と疑えば君の魅力など大した物ではないさ。」

前にも説明したかもしれないがアラド大陸では『ダークエルフ』と言う種族があり、その姿はまさにキュルケに良く似ているのである。違うとすれば、その者達は体術や死霊を呼び出して戦う術に長けて髪が白髪であるくらいであろうか？とりあえずその為、その手の色香には慣れているのである。

そして逆月にしてみれば人から避けられていた時間が長いために、そういったものにすらあまり感情を覚えることが無くなったただけなのだが。

まあ前に珍しく、身分の差で激昂し生徒を叩きのめしてしまったが、平民と自分。

どこか似たものを感じ、そしてそれが無い場所を求めていたのかもしれないが、まだその感情には気付かない。

「結構ドライなのね、貴方。」

キュルケは燃え上がった熱も燻り、冷めた目で逆月を見る。

「さあ、な。そんなことより、まだ君は子供さ。そんな男漁りよりも学生だから自分の力を伸ばすことを考えたらどうだ。」

女性としての魅力など君はもう十分すぎる。ま、娼婦のようにはし

たなく男を求めるなら別だが。」

始めに互いに感じていた怪しげな雰囲気は、今は微塵も感じられない。

逆月はそいい残すと、その部屋を去った。

「あゝあ。落としてみせると意気込んだけど、あれはそう簡単に落とすのは無理ねえ。」

あの人相当身持ちが硬いし、微熱も冷めてしまったわ。」

あの後キュルケは興ざめしそのまま横になりながらフレイムに「男が来たら追い返して」と呟く。

フレイムは主人に従い、男達がやってきては窓に炎を出して追い払ってしまった。

勿論外には黒焦げの男達が転がっていたのは言うまでも無い。

次の日、やはり逆月が早くに目覚め、ルイズを起こし、2人で食堂に行く。そこまでは変わらない。

しかしルイズと別々に食事を取る、逆月は周りが大分変化した。

4日前にギーシュを簡単にあしらった事は、ここで働く平民の鬱憤

を少なからず晴らしていた。

あの決闘の後のシエスタは涙を流しながらルイズと俺に感謝していた。少々大げさとも感じたが、非力で戦うだけの力が無いものにとつてはそれは嬉しかったのだろう。

そしてなにより厨房のマルトーは何よりも喜んでいた。逆月が威張るわけでもなく、態度を変えていなかったのも気に入っているようだ。

「おお！来たか『我らが剣』！こつちに来て座りな座りな！」

「おはようございます、マルトーさん。わざわざすみません。」

「なあに、貴族のあんな顔・あんな格好を見たらこんなのお安い御用さ。」

ほら、シエスタ。たつぷりよそつてやれよ！」

「わかってますよ料理長！」

ずっとこんな感じで、逆月が食堂に来るたびに過剰な歓迎を受けるのだ。

勿論恐縮はするものの、笑顔で食事を用意されると元々おいしい食事がさらにおいしくなる。

「しかし、こんなにおいしい食事を貴族は残すなんてなあ……。俺に

は考えられないもんだ。」

「おうおう、分かってくれるか？お坊ちゃんどもは初めからこんな上等な食事ばかりを食ってるから、ありがたみが分からねえのさ！確かに貴族は魔法が使える。土から鍋を作ったり、でっかい炎の玉を飛ばしたり果てはドラゴンを操ったりなあ。」

「だがこういった絶妙な味付けをすることだって立派な魔法さ。そうだろう、逆月？」

「確かにそうだな。少なくとも俺には絶対にまねは出来ない。ましてやあんな傲慢な生徒ではこれだけのことは出来ないさ。」

「全く、お前はいい奴だ！もうお前がもつと気に入ったぞ！」

マルトーはキスをするとか言ってきたが男同士では流石に勘弁願うと、そのまま料理を平らげる。

「なあ、お前さんは何処で剣を習った？何処で剣を習うとそんなに強くなるのか俺にも教えてくれよ。」

「俺は師匠がいたさ。その人に剣を習い、自分の生き方を教えてもらった。」

「それに後は実戦で死にたくないから必死に剣を振るってきただけさ。」

「

マルトーはニコニコ顔で厨房に響くように怒鳴る。

「お前達聞いたか！」

「聞いてますよ、親方！」

厨房のコックや見習いが一斉に返事を返す。

「本当の達人はこういうもんだ！決して己の腕前を誇ったりしないもんだ。見習えよ、達人は誇らない！」

「達人は誇らない！」

逆月は自分を達人とは思っておらず、上には上がいるので何度か訂正しようとしたが聞いてはもらえない。

マルトーはそれを達人の控えめな所と受け止めてしまっているのである。

その後でシエスタがぶどう酒を注ぐとするが、逆月は酒が苦手なのでそのまま席を立つ。

前に宗教でおかしくなった教徒達と戦っている最中に、転がっているぶどう酒を見つけそのまま飲んだのだが急に眠気が襲ってきた。

何とか事なきを得たものの、後で酒場で改めて飲んでみると自分が酒に弱いことが分かった。貴重な回復アイテムが酒場でしか飲めな

いのはとんだ皮肉だが…

とりあえず、厨房の人達にお礼を言いながらそそくさと出て行く。

そんな逆月をマルトーやシエスタを始めそこにいる平民は、ますます逆月を尊敬していくのであった。

夜と朝（後書き）

投稿の間が開いてしまい申し訳ありません。

年末で忙しいので以前のようなペースは厳しいですが、がんばります。

感想などお待ちしています。

買い物1（前書き）

長らくお待たせしました。続きをどうぞ

買い物1

「ルイズ朝だ、起きろ。」

いつものように逆月がベッドに包まっているルイズを揺り起こす。しかし、ルイズは中々起きずに声にならない声を上げて布団を放さない。

「今日は『虚無の曜日』だから寝させてよ。」

「『虚無の曜日』ってなんだ？」

「何を言ってるの…休みの日に決まってるじゃない…ああ、そっか。言っていなかったわね、サカヅキに。」

要は週に一度の休みの日なので寝させろと言うわけである。そのま丸まると、ルイズは寝息を立て始める。まあ、別に起きなくていいのであれば起こさなくても構わないだろう。

しかし、この間の襲撃は中々大変だった。生徒なら軽くあしらえるものの、教師となると無傷ではすまない。

あのギトーという教師も『スクウェア』という中々実力を持っているようで、少々骨が折れる。

あの時は肉を切らせて骨を絶つと言った形で何とか凌いだものの、このままではまずい。回復薬や万が一武器が駄目になった時の予備も欲しい…

そういえば今日は休みの日と言っていたな。可能であれば薬の補充や武器のアテを確認してみるか？もしかしたら何かめばしい物があるかもしれない。

逆月はルイズをもう一度起こす。

「ルイズ、すまんがちょっと学院長の所に行つて来るがいいか？」

「んゝどうしたのよ急に？」

寝ぼけ眼のルイズは頭だけ此方を向けて話す。

「ちと装備の補充と、薬とかその他日常で欲しい物を手に入れられることが出来ないか聞いて来るんだが。」

「それ、私も行くわ！」

「来ても別に面白くは無いぞ？」

「一応名目は使い魔なんだから私も行かないと駄目じゃない！それに傭兵がどんな面白い物や一日を過ごしてるのかも気になるわよ。」

ルイズが着替えてる間にさっさと廊下に出て、自分の持ち物を確認する。

やはりそこまで不足はしてはいないものの、先を考えるとどうしても物足りない。特に回復薬は絶対に必要だ。

自分はやられる前にやる、と言うのではなく相手の隙を突いて手数を、時には一撃のパワーで押すので被弾も多い。

その為にも是が非でもそれを手に入れないとまずいのである。

ルイズも着替えが終わり、2人は学院長室に向かう。オスマンに装備など買う場所を聞くと馬で3時間の所に町があり、そこで買うことが出来ると教えてもらった。

オスマンに許可も貰い、その際に装備や日用品・薬などを買うほどのお金を貰った。

しかし、皮袋にはずいぶんの重さのお金が入っている。こんなに貰って大丈夫かと聞くが、オスマンにとっては痛くも無い金額だと言う。

それはさて置き、ルイズと一緒に馬小屋に着くと少々困ったことが起きた。逆月は馬に乗ったことが無いのである。

「…これ、初めての人間がいきなり乗っても問題ないのか？」

「無理ね。仕方ないから私の後ろに乗りなさいよ。今度乗馬も覚えておきなさいよ？でないと長い距離の移動もままならないわよ？」

「スマンな、おいおい覚えるようにするさ。」

「ふ、ふん！早く乗りなさい！早くしないと日が暮れるわよ。」

ルイズは少々優越感を感じていた。魔法とかの力は負けてもこの使い魔（あくまでも形式上）にも出来ないことがあるものだ。そしてそれに頼られることも。

一方の逆月は何となくその感情が理解できた。工作上、自分を高圧的に見る依頼主が良くいるのでその手の感情に似ているものだ。まあ、だからと言ってそれに比べればかわいいものではあるのだが。

「ようやく着いたのか…ああ、お尻が痛い。」

「何を言ってるのよ。帰りもこれに乗って帰るんだから。」

学院を出てから3時間、ヘンドンマイヤ程の町に来ている。馬は町の門のそばにある駅に預けている。

町はと言うと、ヘンドンマイヤに何となく似ている。露天・店・商人や人の動き…建物や人種は違ってもこう活気がある所が、である。

「さて、まず薬とか上着とか売ってる店を見たいんだが…」

「装備とか重いから後でいいわね、こっちよ。」

この世界に、工業的な既製品を並べた服屋などというものはあるはずもなく、服というのは手作りか、仕立て屋と呼ばれる店でオーダーメイドされるかどうかである。もちろん、ルイズは後者を選ぶ。

良く考えると元々居た世界では服を作るのに数日掛りなので、これは無理かと思っていたのだがそこは魔法が生活の一部である世界。ある程度用意をすると魔法1つですぐにシャツ、ズボンが出来上がった。

便利であった半面、持ち合わせのお金思ったよりも減ったのは少々残念であったが。

他にも露天や個人の店で簡単な応急手当が出来るようにと、包帯の代わりに出来る布・消毒薬・そして何より日持ちがする食べ物を購入しておく。

因みに逆月のいる世界では食べ物でも体力が回復するので、飲食物はやや多めに持つておくのが癖になっているのはご愛嬌。

多い荷物を持っているのでさぞ荷物持ちが大変かと思いきや、本人は懐に入れているだけである。それでもルイズは「おかしいわよ!」と言って来る。しかし、今までにもあったことなので最後にはおかしいと感じつつも見ない振りをしていたが。

ようやく装備以外の荷物が買い終わった頃には太陽が真上を通り超えていた。

「ようやく買い終わったのね。アンタはさっさと物を買って終わっちゃうかと思ったけど、以外と長く回ったじゃない？」

「やっぱり折角買うには安くていいものを手に入れたいからな。ある程度回るのは当たり前さ。それにいざと言う時に粗悪品のせいであつてなるよりな。」

「やっぱりその心構え一つにおいても私達とは違うのねえ。」

「で、武器屋はどこにあるんだ？」

「ピエモンの秘薬屋近くだからこの辺のはず… あつたわ。」

歩いている所はごみや汚物がその辺に転がっていて悪臭を放つ。その通りに剣の形をした銅の看板が下がっている。2人はその店に入つていった。

買い物1（後書き）

ようやく続きを書けました！が相変わらず先に進むのが牛歩並です。

それでも見てくださる皆様に感謝です！

感想などお待ちしています。

買物2

店の中は昼間を越えたばかりだというのに薄暗く、ランプの灯りが揺らめいていた。壁や棚に剣や槍、そして甲冑が所狭しと並ぶ。

店の奥でパイプをふかしていた50過ぎに見える親父が、入ってきたルイズをいぶかしんで見る。紐タイ留め描かれた五芒星に気づくと、パイプを手放し話しかける。

「貴族様、うちは真つ当な商売してまさあ。お上に目を付けられるような事などこれっぽっちもありませんよ。」

「客よ。」

ルイズは腕を組んで言う。

「貴族様が剣ですかい！いや、こりゃあおつたまげた！」

「どうしてかしら？」

「いえ、坊主は聖具を振る、兵隊は剣を振る、貴族は杖を振る、そして陛下はバルコニーからお手をお振りになる、と相場が決まっておりますので。」

「使うのは私じゃないわ、彼よ。」

店主は愛想良く商売文句を言つと、逆月をじつと見る。

「剣をお使いになるのはこの方で？」

ルイズは頷く。逆月はというと、辺りの剣やレザーのような軽めの鎧も見えているようだ。

「ほう、傭兵かい。どんなものをお探しで？」

「頑丈でこれくらいの剣は無いかな？」

逆月は懷からスツと件の大剣をだす。店主は何処から出したのかと疑問に思ふ前に驚きが先に出ている。

紫色で分厚く、自分と同じほどの長さを持つそれは、店主を悩ますことになる。何故なら店主の持つ剣ではこれに及ぶものが無いと、長年これで食ってきた人間には分かる程の剣であった。

「これは…中々の業物ですな。しかもうちではこんな大きい剣を扱えるほどのものが居なかったんで、こんな長く、分厚い剣は置いておりません。申し訳ねえんですが…」

「そうか、なら仕方ないな。他に何か大型の剣は無いのか？」

「先ほどの剣に比べれば劣りますが、それでも良ければありますよ。」

逆月はそれをお願いすると言った後に、他の剣や軽鎧を探す。ウエポンマスターは基本、手数を持って戦う場合が多いため重曹の鎧は付けずに軽鎧の機動力を重視するのである。

「お待たせしやした、これですよ。」

見た目1・5メイルはありそうな煌びやかな剣であった。柄は両手で扱えるように長く所々に宝石が散りばめられている。見るからに高そうな剣でもあるようだ。

「先程の剣には負けますが、この店一番の業物でさ。あんたならこれくらいの件でも軽がる扱えるでしょう。」

確かに見た目は綺麗である、見た目は。しかし、自分の持つ剣に比べるとあまりにも耐久力が低いのは明らかである。

剣の所々に宝石があると言うことは異物が混ざっていると同義である。そしてそういったものは得てして壊れやすい。しなりが起きた瞬間…。

「折れるな、実践では全く使えない。第一馬鹿みたいな値段だろう？ 買える訳が無いさ。手間をかけて悪いがな。」

「まあ、先程の剣に比べられれば無理がありますさ。折角来たんですから他の道具や鎧なども見てってくださいや。」

「そうさせてもらう。」

さすがに自分が持っている一番良い剣よりも上の剣を持っているとなると吹っかけるのは無理であった。しかしそこは商売人、他のものを何か買ってもらおうと愛想良く接客する。しかし、そこでおかしな方向から声が聞こえた。

「おいおい、こんな店主でも認めた剣を持ってるなんてあんちゃんただもんじゃねえな!？」

ルイズは声のする方に振り向いたが、そこには乱雑に武器が詰まれているだけである。

「今何処からか声が聞こえたけど…?」

「こっちだよお嬢ちゃん。こっちこっち!」

店主は片手で頭を抱えてしかめる。逆月もそこに向かうものの、辺りを見回しても人は居ない。

「ここだってあんちゃん。わからねえか？」

「剣が喋るだど…？」

2人は驚く。店主はその剣に怒鳴り声を上げる。

「やいデル公！お客様に失礼じゃねえか！」

デル公と店主が呼んだその剣は、先程見たあの剣と同じくらいの長さで刀身が細く薄手である。しかし表面には錆が出ており、お世辞にも売り物としては見ることは無いような体たらくの剣である。

「もしかしてそれインテリジェンスソード？」

ルイズが当惑した声を上げる。

「そうでさ、貴族様。意志を持つ魔剣・インテリジェンスソードで、一体何処のメイジが始めたんでしょうかねえ、剣を喋らすなど。とかく、こいつは口は悪いお客に喧嘩仕掛けるわで閉口してしまして…。やいデル公！これ以上失礼があつたら貴族様に頼んでてめえを溶かしちまうぞ！」

「おもしれ！やってみろい！どうせこの世にゃあ飽き飽きしてるんだ！溶かしてみろよ、上等だ！」

2人？の口喧嘩が始まった。ルイズはそれを遮る。

「ちょ、ちょっと待って。インテリジェンスソードってくらいだから何かすごい力でもあるんじゃないの？」

「貴族様、こいつは見ての通り錆だらけでそこらのナマクラと同じ剣でさ。物珍しさでたまたま仕入れてみたんですがこれと言って何も言い事なんざないですよ。強いて言うなら口喧しい話し相手が手に入るくらいですかねえ。」

「へっ！おれの力を見ることが出来ない馬鹿ばかりな奴ばかりで見る奴が見れば俺はすげえんだよ！」

デル公と呼ばれている剣は飽きもせず口？喧嘩している。

逆月はその剣を良く見ると錆が出ているのは表面だけで中身は問題ないのでは？と思い直接触る。やはり思った通り表面は少々ざらざらしているがさっきのきんきらな剣よりは丈夫そうだ。

いきなりデル公は静かになる。ポツリと落ち着いた声？で逆月に話しかけた。

「おめえ、なんか『使い手』のような感じがするな。」

「前に使ってた奴は俺みたい奴だったのか？」

「なんか違和感はあるが、まあいい。あんたなら俺を使ってくれそうだ。俺を買いえ。あと、俺の名前は『デルフリンガー』だ、覚えとけ。」

いきなり口調が豹変し考えるものの、逆月も単純に頑丈な剣であることが分かっているので買うと店主に頼む。しかしルイズが待ったをかける。

「えゝそんな剣にするの？もつと綺麗な剣にすればいいじゃない。」

「いや、こいつは頑丈だな。錆は後で落とせばいいだけさ。」

その後もルイズはぶつくさ文句を言っているものの、ルイズが金を払うわけでもないので大きく口出しは出来ない。店主は剣と一緒に鞘をサービスしてくれた。

何でもこの鞘にしまうと大人しくなるようだ。しかし店主に喧嘩するくらいなら鞘に最初からしまっておけとは思うのだが、それをしなかったのは店主もデルフリンガーもまんざらではなかったのではないかと後で思う。

ちなみに値段は学院長がくれたお金で間に合った、とだけ言うておく。

支払いも終わり2人が出て行こうとすると、店主がこんなことを世間話がてらに教えてくれた。

- ・最近では貴族の下僕に剣を持たせるのが流行っている
 - ・その理由が、トリスティンの城下町を『土くれのフーケ』と呼ばれるメイジの盗賊から守る為
 - ・中々つかまらず、下僕にすら持たせている有様
- 店を出る時にまた来てくださいよ、背後から聞こえた。

太陽のあたる表通りに出ると、日も僅かに傾きかけている。他に買うものも無く、2人は門に向かった。

買い物2（後書き）

デルフとようやく出会った逆月。
∴私の書くペースは今はこれが精一杯ですorz

感想などお待ちしています。

じゃれあい

ルイズ達は学院に戻っている。何とか日が傾く前に学院に戻っては来れ、逆月はお尻をさすりながら武器の手入れに勤しむ。このデルフリンガーは錆だらけなのでその後、店で研磨するための研ぎ石や桶を買ってきた。しかし不思議なもので剣を研いでいるものの、全く錆が落ちてこないのである。

「あたた…まだお尻が痛む。しかしこの錆は一体何なんだ、デルフ？ 幾ら丁寧に磨いても落ちないぞ。」

「さあ？ おれっち久々に手入れしてもらったのは嬉しいんだけど、あんまり久々だから忘れちゃった！」

「あのかな…一体どんくらいなんだよ。」

「少なくとも数千年ぶりだな！ あのブリミルてえ神様の時代からだぜ！」

「幾ら珍しい剣だからって、そんなに経ったら剣は朽ちるもんだろ。それとも何か？ あの固定化って力で長く形が留めて入られてるのか？」

「忘れた！」

無言で逆月は離れた場所にデルフリンガーを突き刺すと、光剣を構えてデルフに振りかぶろうとする。

「ちょ、サカヅキなんか知らんけどやめて、それはなんか危なそうだ！」

「思い出したか？」

「んーと、えーと…わからん！」

そんなコントにも見えるやり取りをしていると後ろからルイズがやってくる。隣にはキュルケも居る様でやはりと言うか、2人はいがみ合っている。因みに光剣は懐に入れている。

「あら、そこにいるのはサカヅキじゃない。この前は残念だったわよ？」

「サーカーゾーキー！あんた一体キュルケと何をしていたのよ！」

キュルケはわざとらしく唇に人差し指を添えながら逆月に話しかけるとルイズは逆上する。

逆月はお尻が痛くおまけに錆も取れずイラッときた彼が、僅かに口の端を吊り上げると同時にルイズを弄ってしまうのは無理も無いことで。

「ナニをしているとでも言っただけかい？」

「え、ちょ、あ、あああんだ下品よ！キュ、キュルケと、その…っ！」

しどろもどろになりながらルイズは茹でダコのように真っ赤になっている。キュルケはちよつと意外な目線を向けるもお互いにそ知らぬふりで会話を合わせる。

「そうよ、彼っいたら上手だったわよ（断り方が）。お陰で私はぐったりとしちゃったわ（主に後から来る男を追い出したりするのに面倒で）。」

「そ、そんなの結婚前に何してんのよ！それにサカツキもこいつにだけはとあれほと言ったじゃない！」

「まあんな事無いが。俺が居た所はこういった女性は多く居たから慣れてるさ（勿論下手に手を出すと命が無いが）。」

ああ、因みに俺が部屋に連れ込まれたが誘いを断っている。」

ルイズが僅かにポケーツとしてるところを見て、2人で大笑いしてしまった。ルイズは我に返るとそれこそ鬼のような顔で杖を振り2人に向かって爆発を起こしまくっている。

久々に大笑いしてしまった。こんな大笑いが出来るなら、僅かにここで過ごしていいかと思ってしまう。しかしこの爆発、幾らなんでもまずいよなあ…教室を爆発させる威力だったよな？

じゃれあい（後書き）

短くて申し訳ありません…中々キャラが動かしにくいものです…
orz

感想などお待ちしています

宝物庫の襲撃（前書き）

お待たせいたしました。続きをどうぞ…

宝物庫の襲撃

『土くれ』はトリステイン中の貴族から恐れられているメイジである。それこそ東西南北、宝があれば神出鬼没に現れてはそれを奪っていく大怪盗。

その手口は僅かな隙も見せない鮮やかな手口の時もあれば、建物をそのままゴーレムで潰して押し入ることも。また白昼堂々正面から強盗をする時もある。

そんなメイジにも共通点があり、『鍊金』と『ゴーレム』である。つまり土くれは少なくともトライアングル以上の土メイジであることである。

また、現場には何処にも『秘蔵の○○、確かに領収いたしました。土くれのフーケ』とサインを残すこと。そしてマジックアイテム、強力な魔法が付与されているお宝が好きと言っこと…

話はルイズ達が騒いでいる少し前：

大きな二つの月明かりが明るく照らしているここは、魔法学院本塔の五階。そこに土くれのフーケは佇んでいた。

黒いローブに長く緑の髪を夜風に靡かせ悠然としているその様は、国中の貴族を手玉に取った怪盗の風格と言っものがある。

「流石は魔法学院本塔の壁ね、物理衝撃が弱点？こんなに厚かったらちよつとやそつとでは崩せないわよ！」

ぼやくのは秘書であるロングビル、彼女は何を隠そうフーケであったのだ。

ここの宝物庫にあるマジックアイテムを狙おうとしたのはいいのだが、その弱点を知らない。

そこに以前コルベールから下心ありありと食事に誘われた所、その誘いを受け流しながらさり気なくここ宝物庫の詳細を聞き出し『物理的な衝撃に弱い』と分かり下調べに来ていた。

まあ、折あらばそのまま盗み出そうかとも考えていたのだが。

しかしながらも、フーケは『土』系統のエキスパート。魔力で足の裏から壁の厚さを測る事は造作も無く、『固定化』しか魔法がかかっていないことを突き止める。

「こりゃ私のゴーレムで破壊することすら無理か。」

強力な呪文がかかっているために錬金の呪文で穴を開けることも出来ない。少タイライラしつつも腕を組みながら呟く。

「『破壊の筒』を諦めたく無いし、どうしたものやら…？」

話はまた現在に戻る。

そこに予想もしない場所からいきなり魔法の気配がした。どうやらあのルイズと傭兵が騒いでいるようだが、ルイズが杖を振るっている。あの少女は癪癪持ちなので何かまたやらかしたのかと傍観している。

ドゴン！とちょうど宝物庫近くの壁に魔法の塊が着弾し、しかも自分でもどうしようもない壁にひびまで入ってるではないか。

この壁にひびまで入れたルイズの魔法をもう少しよく見て見たいものだが、千載一遇のチャンスを逃すわけにも行かない。

地面に降り立つと長い長い詠唱を唱え杖を地面に振ると、音を立てて地面が盛り上がり始める。土くれと呼ばれるその力が最大限に発揮するところであった。

そのころ逆月達はようやくルイズの癪癪が収まったのか、肩で息をして目の前には爆風を受けてススで汚れている逆月とさっさと上空に逃げていたキュルケがあった。

「全く、こんなに周りを穴ぼこだらけにしてどうすんのよ？やたらめったらに魔法をぶつ放すし、あんたの使い魔のサカヅキまでスだらけにして…。」

キュルケはあきれるわと言った顔で上から降りてくる。

「あんた達が悪いんでしょーが！人を小馬鹿にしておちよくるからでしょ！」

「だってねえ…あんたのその顔を見てるとつい何というか、からかいたくなるのよねえ。」

「それに何だかんだでルイズも知っていたじゃないか？嫌う振りしてそのことに興味津々なお年頃、といったところか？」

この時に他の人が見ればキュルケも逆月もニヤニヤとして意地の悪い顔だっただろう。ルイズは顔を真っ赤にしてまた杖を振り上げようとする。

「ルイズ、言い忘れたが後ろの方で小さな爆発音が聞こえた。あんまり癪癪が過ぎるとまずいんじゃないか？ただでさえ教室を爆発させている前科があるんだからな。」

逆月は少しからかい過ぎたと思いながらも、ルイズの泣き所を突き落沉着かせようとする。

「うぐ、あんたねえ！そういう事は早く言いなさいよ！……最初は大人しいかと思つてたけど結構意地が悪いのねあんたは！」

「癪癪を抑えてくれれば大人しくするが？」

「っ。」「

結局ルイズは杖を収める。ルイズは自分でも怒りっぽいのは自覚しているので言い返せずにただ二人を睨みつけるだけである。

「そういえば二人はこっちに何か用でもあつたのか？」

「いーえ、私は特に用はなかったけどキュルケがあんたの所に行くから一緒に来ただけよ。」

「私はあの時の光る剣とか見せて欲しかったのよ。それにあなたにも興味が尽きないしね……。」

「光る剣は生憎見せられないし、お付き合いはお断りさせてもらつよ。…それに後ろにおかしな気配があるしな。」

逆月はそう言つとそれきり二人の声を無視して一直線にその音がする方向に向かう。

フーケは薄く笑いを浮かべ、壁の前にゴーレムが作り出された。そのまま肩に飛び乗るとひびのある壁に向かって、ゴーレムの腕を叩きつけると同時に拳を鉄に変え大きな音と共に大穴を空ける。

ロープが僅かに揺れると、その腕を伝い宝物庫の中に入り込み、様々な宝があるが目もくれずに『破壊の筒』の場所を探す。

ようやく破壊の筒と書いてある展示物の前にたどり着く。しかしハルケギニアで見たこともないような金属の色、そして所々が青い透明な物質で覆われている角ばったものでどのように使うかもわからない。

手に取ると見た目に反して軽い。何かマジックアイテムの効果でもついているのだろうか？しかし考えている暇もないのでそのままゴーレムの肩に飛び乗ると杖を壁に向けて振る。すると大きく文字が刻まれた。

「破壊の筒、確かに領収いたしました。土くれのフーケ」と。

逆月が向かった先には、巨大な土や岩でできているゴーレムのようなそれがのっしのっしと歩き始め今にも魔法学院の城壁をまたごうとしている。

驚くのはその大きさであり、とても自分一人では対抗できそうにもない。舌打ちしながらも肩に黒いロープを羽織っている人物を見る。

瞬時に光剣を構え左手に自分の力で出せるもう一本の短い光剣を作り出す。

ちなみにこの剣は光剣を使っているときだけ鬼神の力を使って作れるレプリカのような物で、力の消費も僅かで何度でも作り上げられる。しかしごく僅かの間だけしか存在できなく、連発もできないために本来は接近戦での手数を増やすためのものでしかない。

それを逆月は肩に乗っている人物に向かって投げナイフのように投げつける。しかし相手は逆月を一瞥するとあっさり避けそのまま城壁を越えてしまった。その剣は直後に消えてしまった。

流石に敵わなくとも追跡を行いたかったが城壁は高く、歯噛みをして悔やむ。ようやくルイズ達が出てきてキュルケに空を飛んでもらって、どこに向かったかだけでもわかるか頼んだが途中で土の山が残っているだけでそれ以降はわからないという。

フーケはまんまと逃げてしまったのだった。

「おれを無視して置いてくんじゃねーよ…。」

穴ぼこだらけの広場ではルイズとキュルケが来て会話に入るタイミングを逃し、そのまま忘れ去られているデルフがそこにいた。

宝物庫の襲撃（後書き）

仕事が忙しくなり、ますます時間がなくなる今日この頃。そしてようやく剣聖に転職できたので小説にネタを増やすことができる自信できました。

これからもがんばりますのでよろしくお願いします。

感想などお待ちしています！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0813p/>

光剣を持つ者

2011年5月23日03時31分発行